
夢のつづき

渡瀬 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のつづき

【Nコード】

N8651Q

【作者名】

渡瀬 圭

【あらすじ】

古いスケッチブックに描かれた自分に良く似た少女を見てから、私は不思議な夢を見るようになる。夢の中で、誰か私を呼ぶ声がする。『琴音 おまえをあきらめない——』私はこの声を知っている。確かに大好きだった人の声……。私は不慮の死を遂げたという少女の生まれ変わり？ そしてこの現代で、私は再び運命の人めぐり会——う。

1、私にそっくりな少女

「ねえ、浩平。本当にこの蔵の中に、目当ての楽譜ってあるの？」

薄暗い屋内に、見渡す限り整然と積み上げられた木箱の山を見上げ、私、川瀬早希かわせ せきはふうっとため息をついた。

学校帰りに母親に言付かった届け物のため、立ち寄った橘浩平たちばな こうへいの家。

その蔵でゴソゴソ捜し物をしている彼に気が付いたのが運の尽きだった。

もう、かれこれ小一時間、一緒に探しているが見つからないのだ。制服の上にはコートもはおり、首にはマフラーも巻いてはいるが、さすがに1月半ばのこの季節に、暖房のない屋内の作業はこたえる。

「姉貴がここにあるはずだって言ってたんだけど。あの人の言うことだから、俺もちょっと自信ないし。早希はいいよ、ここ寒いだろ。俺一人でもう少し探してみるからさ」

幼なじみの腐れ縁。

浩平と私の関係を一言で言うとなんかそうなる。

お互いの親同士が友達同士で、家も近かったせいもあって、物心ついたときから、一つ違いの姉弟のように過ごしていた。

私に通う高校に浩平も一年遅れで入学し、今もその関係は幼い頃と変わらない。

一人っ子の私にとって、浩平は口は悪いが困ったときには頼りになる「兄」のようでもあり、何となく放っておけない「弟」のようでもあり、何でも気軽に話せる気心の知れた「親友」のような存在でもあった。

「制服、埃だらけになるぞ」

脚立の上から浩平の言葉が降ってくる。

「どうせ、もう埃だらけだもん。もうちょっと付き合っただけよ」

と、私は苦笑いで答える。いつものごとく、乗りかかった船だ。

浩平の家は、彼のお父さんが10何代目とかいういわゆる旧家で、蔵の大きさも半端じゃない。

最近納められたようなプラスチックの衣装ケースに収まった物もあるが、大部分は大小様々な大きさの古びた木箱や長持、行李といったものだ。

中には彼の家の歴史を証明するような、年代物の掛け軸やら陶器やらが、納められているらしい。

鑑定に出せばびっくりするような高値がつくものもあるそうだ。

そんな古い蔵だから、ほこりの量も半端じゃない。

浩平のお母さんが、時々の中のを虫干したり、掃除したりもしているようだが、主婦一人の力では手がつけられないような箇所もたくさんあるのだ。

「その楽譜って、なければ困るんでしょう？」

「うーん、なければ買いに行かなくちゃいけないかなあ。『卒業生を送る会』で、ピアノの伴奏頼まれちゃってさ。気が進まないんだけど、断り切れなくて……」

「『卒業生を送る会』って……例年音楽科の生徒しか出演してないやつでしょう？　すごいじゃない、浩平。普通科の生徒が演奏を依

頼されたなんて話聞いたことないよ」

「演奏じゃなくて伴奏。音楽科でバイオリン弾いてるヤツに頼まれたんだよ。そいつ、同じ中学校だったヤツで、拝み倒されてさ……」

浩平がピアノを始めたのは幼稚園の頃。

教室に通い始めた私を見て、浩平は「僕も一緒に習う」と言っ
てきかなかったらしい。

幼い頃の浩平は、いつも私の後を追っていたから。

だが、浩平にはピアノの才能があったのだろう。私と違い彼はメ
キメキ上手くなった。その上達の早さは先生がびっくりするほどだ
った。

私は中学校で運動部に入ったのを機に、ピアノはやめてしまった
が、その頃から浩平は新しく電車で小一時間かけ、某音大の教授の
元にも通うようになっていた。

だから、浩平が私と同じ高校を受けると聞いた時、てっきり浩平
は音楽科を受けるものと思っていたくらいだ。

「でも、浩平のピアノが聴けるなんて嬉しいかも。浩平のピアノ、
私大好きだもん」

「…おまえ、そんな恥ずかしいセリフ、よく平気で言えるよな」

「そお？　だって本当にそう思ってるんだもん。私、浩平のファン
だから」

脚立の上を見上げながら笑いかけると、浩平がフツと目をそらし
て呟いた。

「…危なっかしいよな。早希は」

「? どういうこと?」

「……誰に対しても全然無意識で、期待させるようなこと言うだろ? いつも」

「期待って?」

「……高校2年にもなって、ホント天然!」

むっ、何よ、それ?!

「……来月は空手の試合もあるし。俺、個人戦だけじゃなくて団体戦の方でも選手登録されてるから、練習出なかつたら、先輩にどやされるだろうな」

「え? じゃあ、断っちゃうの?…」

浩平は小学生の頃から空手を習い始め、こちらも相当な腕前なのだ。

彼の部屋のクローゼットには、かなりの数のトロフィーや盾が眠っている。

空手との両立は、ピアノの先生には渋い顔をされているようだが、頑としてしてやめようとしなない。

試合中の浩平の活躍は、応援にかり出された幼なじみとしては鼻は高いが、やはり私はピアノを弾いている浩平の方がステキだと思うのに、な……。

少し、がっかり。

私はちらりと浩平に視線を走らせ、目を伏せた。

搜索中の棚には目当ての物は無かったようで、浩平は脚立から下りてきた。

そして、私に視線を向け、はぁっとため息をついた。

「…でも、断れないよなあ。期待されてるんじゃない。まあ、なるようになるか」

「え!？」

「正直、まだ迷ってたんだけど、そんなガツカリしたような顔されちゃうと、な？」

「?」

「ファンは大事にしないといけないよな、うん」

浩平はそこで話を打ち切り、新しい棚の搜索を再開すべく脚立を私の側に移動させた。

ひょっとして、私に気を使ってくれたのかな。

よし、ここは素直にお礼を言っておこう。

「…ありがとう」

「…別に早希から言われたからってわけでないから。さっきも言ってたように断りにくい状況で…：相手、かなり押しの強いヤツでさ。とにかく、マジで楽譜探さなくちゃな。もし見つかったら、楽譜代、浮いた金、山分けしようぜ。何か奢ってやるよ」

「えっ? 本当? じゃあ、私も真剣に探す!」

今まで真剣じゃなかったのかよ…という言葉聞き流しながら、私は浩平を制して脚立に上がりまだ手をつけていない棚の搜索に取りかかった。

ブンと儼くさいすえた紙の臭いが、幼い頃の記憶を揺り動かす。

「……この蔵に入るのも久しぶり。懐かしいな。小さい頃は、よく二人で冒険と称して、ここに潜り込んで叱られたよね。私のこと、お姉ちゃんって呼んだりして、あの頃の浩平、可愛かったよねえ」

私に脚立を取られた浩平は、少し離れた棚に並ぶ古い行李を引っ張り出し、中をチェックしようとしていた。

過去の思い出に浸る私を軽く一瞥し、ぶっきらぼうに浩平が答える。

「年上って言っても、生年月日、一週間しか変わらないじゃん。いつまでも姉貴面するなよな」

「私は3月26日生まれ、浩平は4月2日生まれ。一週間違いでも、一学年違うんだもん。ホントなら私のこと、『川瀬先輩』って呼ばなきゃいけないんじゃない？」

最近特に浩平は年下扱いされることを嫌う。

それは感じているのだが、つついからかってしまうのだ。

「……年上だって言うなら、幼稚園の頃ならともかく、ちょっとは女らしくしたら？ 一緒に探してくれるのは嬉しいけど、制服のスカートのまま脚立に上るなって。目のやり場に困るし。俺だって男なんだからさ」

「大丈夫よ。中にはちゃんと体操服の短パンはいてるもん」

「…それって中坊の言葉じゃん。高2のくせに、早希はホント色気の欠片もないよな」

『色気の欠片もない』と言われ、カチンときた。
売り言葉に買い言葉。

「ちゃんとステキな男性の前なら、私だって女らしくなるもん」

浩平もいつもの調子で言い返してくるに違いない。

そう思って身構えていたのに、浩平はなぜか傷ついたような瞳で、「そっか」と私を一瞬見つめると、くると背を向け、黙々と楽譜探しに没頭しだした。

怒ってる？ どうして？

いつもの冗談なのに。

自分だって私のこと、『色気の欠片もない』なんて言ったくせに。うろたえて、泳いだ視線の先に映ったもの……。

「…あつ、ひよつとしたらあれじゃない？」

棚の上に楽譜のような冊子を認めた私は、脚立の上で背伸びをした。

……届かない。

仕方がないので、その下に積まれている物も、まとめて引っ張り出そうとした時だった。

「おい、ダメだ、早希。そんな下から引っ張ったりしたら————」

浩平の止める声がしたが、私が力任せに引き抜いた方が早かった。とたんに上に積んであった物が、ものの見事に崩れてきた。それらは見事に私の上に降ってきて、私は脚立の上でバランスを崩す。

「!？」

完全に後ろに重心が傾き、脚立から足が離れた。そのまま背中から床にたたきつけられる筈だったのだが・・・。

棚の上のものがバサバサツと床に落ち、辺りは埃がもうもうと立ちこめる。

「おいつ、大丈夫か？」

身体の下から声がした。

浩平がとっさに庇ってくれたため、私は彼の上に軟着陸することになったのだ。

「うん、大丈夫……ありがとう」

私の返事にホッとしたような空気が伝わってくる。

びっくりした。

落ちていく間、グイと引っ張られた腕が少し痛い。

すごい力。浩平ってやっぱり男の子なんだ。

脚立から落ちたショックより、そんな当たり前なことに気づいたことがショックだった。

小さい頃からずっと浩平の事は私が守ってあげなくちゃいけない

ように思っていた。実の弟に接するように。なのに、いつの間に立場が逆転してたんだろう。

その上、今浩平の上にすっぱり収まっているようなこのシチュエーション。

一体どうやって取り繕えばいいの!?

変に緊張して、体を固くしたその刹那、

「・・・重っ!」

浩平の声。

「って、ちょっと失礼ね!!」

浩平の上から、怒って飛び上がる私に「ホント、相変わらずそっかしいよな」といつもの毒舌。

いつもと変わらない浩平。なんだかホッとする。

だが、立ち上がろうとしたその瞬間、浩平は「いっ…」と呟き、再びストンと尻餅をついた。

「どうしたの?」

「う……ん、立てない。ちょっと足…挫いたみたい」

「嘘!?……」

とたんに私はオロオロしてしまふ。

「そんなたいしたケガじゃない、そんな顔するなって」

と浩平は私の頭を軽く叩いて、気を逸らすように辺りを見回した。

「しかし、思いつきり散らかしてくれたよなあ。……あれ？ それって……」

私は浩平が指さした方向に目を向けた。

思ったとおり、棚の上にあったものは楽譜だったようで、辺りには何冊かの楽譜やら冊子、ノートなどが散らばっていた。

だが、浩平が指していたのは、中ほどのページを開いた状態の1冊のスケッチブックだった。

何気なく拾おうとして、ふと、手が止まる。

スケッチブックに描かれていたのは、若い女性だった。

眩しそうな表情を浮かべ、宙に手を差し伸べている。

描いた人物はかなりの画力の持ち主らしい。

鉛筆のデッサン画にも関わらず、その女性が浮かべている、はにかんだような微笑みには、見るものを惹きつける力があつた。

この絵を描いた人物は、きっとモデルの女性に恋をしていたに違いない。

そんな優しさに溢れた描き方だった。

しかし、何より驚いたのは、その女性の造作だった。

少し気の強そうな二重の瞳。

若干太めの眉にかかる黒い髪。

頬にわずかに浮かぶ片えくぼ……。

……この人って……

「なんか、早希にそっくりじゃない？」

隣からスケッチブックを覗き込んでいる浩平が呟いた。

私が肩くらいの長さに髪を切りそろえているのに対し、スケッチブックの女性は真っ直ぐなロングヘアだった。

それ以外は、本当に私そっくりの肖像画。

だけど、私の筈はない。

なぜなら、スケッチブックの隅っこには荒々しい文字でこんな殴り書きがあったから。

『琴音 おまえをあきらめない——』

2、ほつれ始めたもの

「——いくな。」

震えるような悲痛な声。

誰かが私を強く抱きしめ、耳元で囁く。

私は声の主に視線を向けるが、私の瞳は何も映さない。
目の前には真っ暗な闇が広がるばかりだ。

だけど、この声を私は知っている。
この声は私の一番好きな人の声。

——どうかそんなに悲しまないで。
——こんな私のことは、早く忘れて。

頬に冷たい雫が落ちた。
耳に残る大好きな人の切ない声。

「…この世に魂があるかぎり、俺はおまえを探し続ける。
俺は、おまえをあきらめないから——」

そんな夢を見た。

切なさ、泣きながら目が覚めた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「だくから、早希がいつまでもへこんでると、俺まで気が滅入っちゃうんだけど。ケガしたのは俺が鈍かったせいで、早希がそんなに責任感することないって」

「そんなこと言ったって……」

駅から学校への緩やかな上り坂。

吐く息を白く凍らせる、清冽な朝の空気の中、右手でカリカリと頭をかきながら、浩平が後ろを歩く私を振り返る。

左足は膝から下を完全にテーピングして固めた状態。

その歩行を助けるため、左手には松葉杖が握られている。

全治3週間の捻挫。浩平のケガは思った以上に『重傷』だったのだ。

「ケガ治るまで、そうやって毎日俺のカバン持ってくれるんでしょ？
だったら、それでアイコってことで」

「……だけど」

私が調子に乗って脚立の上で無理矢理柵の物を引っ張ったりしなければ、浩平はケガすることはなかったのだ。

口は悪いけど、基本的に浩平は優しいから、人を責めたりしない。胸の前で二人分のカバンを抱えた手にきゅっと力が入る。

「どんくさい早希がケガするのを目の前で見るより、俺的にはずっとマシだし……」

「――！? ちょっとお、『どんくさい』って何よ！」

前言撤回。

年下のくせになんて失礼なヤツ！

私が真っ赤になって怒ると、あはは…と浩平が嬉しそうに笑った。

「――怒ってる方がいいよ、早希らしくて。へこんでる早希なんてらしくない」

「……！」

笑ってる方がいいよなんて言うならまだわかるけど。

そんな言い方だと、いつも私が怒ってるみたいじゃんって言いかけたけど、私を見る浩平の瞳がいやに優しく感じて、言葉を飲み込んだ。

刹那、そんな浩平の肩を掠めるように、白い一片が視界を横切った。

「あっ、雪」

見上げると、どんよりと曇った空は今年最初の白い欠片たちをチラチラと手放し始めている。

「ほんとだ。道理で寒いと思った」

そっと手を伸ばして、その一片を受け止めた。

白い結晶は掌の熱で、すぐに透明の水滴に変わる。

「あ」

浩平が驚いたような声をあげた。

「何？」

「今の早希、あのスケッチブックの女の人にあんまりそっくりで、ゾクッとした……」

スケッチブックの女の人——。

今の私みたいに眩しそうな表情を浮かべ、宙に手を伸ばしていた。たぶん琴音さんって名前の女性。

『琴音、おまえをあきらめない——』

スケッチブックの片隅に書かれていた荒々しい文字。

「……琴音さんって誰かわかった？」

「ん……。じいちゃんの叔父さんの恋人だった人みたい。じいちゃんの叔父さんって画家だったんだよ。あのスケッチブックはその人が描いたものだったんだ。たちばな・きりと橘桐人っていつ、美大在学中から色々な作品展に入選して、結構将来の期待もされていたらしいけど、若くして亡くなっちゃったんだって」

「亡くなったって……病氣かなんかで？」

「うーん。死因はよくわからないけど、琴音さんが亡くなって、後を追うみたいに死んだらしいよ。だから俺の曾おじいちゃん、次男だったんだけど、この家を継ぐことになったんだって」

「琴音さんも……死んじゃったの？　なんで？」

「事故かなんかで。じいちゃんも小さかったから、その辺のこと、よく覚えてないらしいんだ」

琴音は事故で死んでいた――。

今朝泣きながら夢から目覚めた時、何やら予感めいたものがあつた。

夢というには、いやにリアルだと。

「私、今朝変な夢をみたよ。私が琴音さんになったような夢……」

琴音に気持ちしがシंकロしたような夢。

夢の中で誰かが「いくな」と言った。震えるような悲痛な声で。「いくな」というのは「逝くな」だったのかもしれない。

「そっか。スケッチブックのあの言葉、ちょっと衝撃的だったせいかなあ。あんなに早希に似た人だもん。あんまりいい気、しないよな。でも、ずっと昔のことだから。もう気にするなよ」

「うん……」

そうだ。ずっと昔の出来事だもん。気にしても始まらない。

私はほっと小さなため息をつくど、さらに勢いを増して舞い降りてくる雪を見上げた。

その時だった。

「橘君！　どうしたの？　その足！？」

腰まであるストレートの黒髪を靡かせた小柄な女の子が、驚いた顔をして駆け寄ってきた。

白く細い指先が、浩平の右腕になにげに触れる。

「ちょっとドジって捻挫」

「ドジってって……、大丈夫なの？」

「うーん、完治には3週間かかるそうだけど、ケガしたのは左足だし。ピアノ弾くのは支障がないみたい」

「そう。……橘君には悪いけど、取りあえずホッとしたかも。今からまた代役を捜すとなると大変だもん」

にっこり微笑む様は、女の私が見てもとてもかわいい。

飛び交うフランクな会話から、二人がかなり親しいことがわかる。今まで浩平からは特に親しい女の子の話なんて聞いたことがない。考えてみれば、学年が違うせいもあって、私は浩平の学校生活をあまり知らなかった。

授業を受けてる浩平も、休憩時間に友達と談笑している浩平も、私は知らない。

ましてや、浩平のガールフレンドの存在なんかは全くわからなかった。

ブラウスのリボンが青だから。彼女は音楽科の生徒だということがわかる。

普通科の生徒は赤のリボン、美術科は緑。私の通う高校では、制服を見て何科の生徒かわかるようになっていたのだ。

私は無意識に、ぼーっと彼女を見ていたらしい。
彼女の視線が私の視線に絡んだ。

「あ……私、神崎美月といいます。橘君とは中学3年間ずっとクラスメイトで、今回そのよしみで

『卒業生を送る会』でピアノ伴奏を頼んだんですよ」

ねっ、と微笑みながら、神崎さんは浩平をそっと見上げた。

神崎美月という名前を浩平から聞かされた記憶はない。

もっとも、浩平が私にプライベートなことも話さなきゃいけない義務なんてないんだけど。

「それだけですから。……だから、誤解しないで下さいね。川瀬早希先輩」

彼女の視線がなぜか意味ありげな気がした。

思わず頬がカッと熱を持った。

誤解って、一体何を誤解するっていうんだろう。

「――別に私は浩平の家族でも恋人でもないですから」

「え？」

「ただの幼なじみですから。私が浩平のケガの原因を作ったから、こうして一緒に登校しているだけで。――だから『誤解』なんてあり得ないですから」

神崎さんはバツの悪い顔をして、チラリと浩平の顔を見上げた。

「早く行かなきゃ遅刻だぞ」

浩平は無表情で私から視線を外すと、歩く速度を速めた。
なんだか胸の奥の方がチリチリしている。

「……そうなんだ」

神崎さんが私の隣でポツリと呟いた。その直後。

——良かった。

と彼女の唇が動いたのを見た気がした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「早希！ 見てたよ。一緒に登校なんて。ついに浩平君と付き合う
ことになったの？」

教室に入るなり、親友の牧杏子まき・きょうこに捕まった。

私は杏子のはしやぎように小さくため息をつき、浩平との登校の
訳を杏子に話してきかせた。

「だいたい私と浩平が付き合うなんて、ありえないから」

「そうかなあ。早希と浩平君だったらお似合いだと思うけど」

「だって年下だよ」

「別にいいじゃん。浩平君しっかりしてるし。早希の方がよっぽど年下に見える」

——どうせ私はおっちょこちょいで頼りないもん。

そのせいで、浩平をケガさせちゃったし——。

私は席に座って1時間目の用意をする。杏子が興味津々って感じで私を覗き込んでいる。

「物心ついたときから、姉弟同然できてるんだよ。今更恋愛の対象になんて考えられないもん」

「……そんなこと言って。いいの？」

「何が？」

「浩平君って、もてるよ。」

サラリと言った杏子の言葉に、また胸の奥がチリチリし始める。

「空手部の中でも何人か告ったって子知ってるよ。今のところみんな断ってるみたいだけどね。」

だって、1年で全国狙えるってだけでもかっこいいのに、ルックスも性格も特に欠点ないじゃん。

今まで彼女がいなくて方が不思議じゃない？」

しかし全治3週間じゃ来月の試合は無理だろうな、空手部にとっちゃ痛いなあと、杏子はブツブツ言ってる。

杏子は浩平と同じく、空手部に所属しているのだ。

だから、浩平のことは、彼女はクラブの後輩として、よく知って

いる。

ポニーテールで白い胴着に黒帯を締め、型を演じる杏子はすごかったよくて、親友としてはいつも鼻が高い。

ただ思ったことをズケズケという物言いは、玉に瑕って感じだけど。

「早希は浩平君の側にいるの、あたりまえのように思ってるけど、彼女ができたならそういうわけにもいかなくなると思う」

「それは、わかってる」

私、ホントにわかってる？

浩平の隣のポジションに知らない女の子が座るなんて、今まで考えたことがなかったことに気づく。

何気なく、神崎さんのサラサラの長い髪と笑顔を思い出した。

「『卒業生を送る会』でさらにファンが増えるかもよ」

「！……ん、もう、浩平のことは良いから、もっと楽しい話しようよ！」

「もっと楽しい話？ 放課後、カラオケか甘味処でも行く？ 早希が行きたいっていうなら、クラブサボって付き合うけど？」

「放課後？……行きたいけど無理だわ。だって浩平の家まで鞆持ちしなきゃいけないもん」

「そっか。ま、浩平君が完治するまで頑張りなよ」

「うん……。あゝあ、ホントつまんないなあ！」

浩平のファンが増えようが、浩平に彼女ができようが、私には関係ない。

ただ……。

杏子と気晴らしに寄り道することもできないし。

変な夢に魘されながら目が覚めるし。

浩平のケガは思ったよりひどいし。

これから毎日、登下校、浩平の鞆持ちしなきゃいけないし。

そのため今日から浩平と神崎さんの練習が終わるのを待たなきゃいけないし。

ホント、つまんないことばかり。

なんだか急に人生が色褪せてしまったような気がした。

それにしても、どうして神崎さんは私のフルネームを知っていたのだろう。

3、動き出した歯車

見えないものが見えてきて
見えてたはずのものが見えなくなる。

何が真実で、何が偽りか、
何が正しくて、何が間違っているのか、

次第に境界線があやふやになっていく。

ただ分かっていることは、
一つ歯車が動き始めると、それは全てを巻き込み、もう元へは戻れないって事――。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

放課後の学生食堂。

テーブルの端っこに腰掛け文庫本を読んでいた私は、パサツと本をテーブルに置いた。

すっかり冷めてしまったレモンティーの残りを飲みほすと、私はぐるっと辺りを見回す。

隣のテーブルには文化系クラブと思しき一団が、缶コーヒー片手に、何やら熱心に話し合いをしている。

運動クラブの休憩と思われる人たちやら、一目で恋人同士とわかるようなカップルやら。

放課後の学食は思った以上に混み合っていたが、私のように一人で暇そうに時間を潰しているような人間は他にいなかった。

私は部活に入っていない。

浩平と違って何をやっても『並』でしかない私は、ピアノも、中学生の頃頑張っていたテニスも結局長続きしなかった。

いつもなら早々に帰宅の途についているはずだが、浩平のケガが治るまでは、私には浩平を自宅に送る義務がある。

今、浩平は神崎さんと『卒業生を送る会』に演奏する曲目の練習をしている筈だった。

セッションの練習が終わるまで、私は学食で時間を潰そうと考えたのだが、30分も経たないうちに、なんとなく居づらい気分になっていた。

私は鞆に文庫本をしまうと、レモンティーの空き缶を手に、席を立った。

まだ、浩平の練習が終わるまで、小一時間かかるだろう。

これ以上は学食で時間を潰せない。

一般教室は既に暖房が切られている。

一月半ばのこの時期、暖房のない部屋で1時間近くも過ごすのは、はつきり言って拷問だ。

仕方がない。

浩平の練習しているピアノ室で待たせてもらおうかな。

久しぶりに浩平のピアノも聴いてみたい気がする。

だけど……。

『……だから、誤解しないで下さいね、川瀬早希先輩——』

今朝の神崎さんの言葉を反芻する。

私は彼女のことを知らなかったが、彼女は私を知っていたようだ。『誤解しないで』という言葉はその通り解釈すると、〈浩平とはただのクラスメイトだから、心配しないで〉というふうに受け取れる。私には浩平を心配するような義理はないが、神崎さんが浩平に特別な感情を持っているなら、まさか本人がいる前でそんな言い方はしないはずだと思う。

そう考えると、私がただの幼なじみだと言い切った後、彼女が妙に嬉しそうに見えたのは、気のせいだったのかもしれない。変に気を回す必要もないだろう――。

そう考えながら、私は学食の入口にあるダストボックスに空き缶を投げ入れると、ごく軽い気持ちで、音楽科の校舎に足を向けた。

私の高校には音楽科・美術科・普通科が併設されていて、校舎もそれぞれが独立している。

音楽科棟の1階には、個人的なレッスンを受けたり、放課後ピアノを練習するための6畳ほどの部屋が10部屋ほど用意されている。各部屋にはグランドピアノが用意されており、専科の生徒が自由に使えるようになっていた。

浩平は5時半まで、そのピアノ室を予約していると言っていた。

音楽科の校舎には毎週水曜の3、4限にある選択音楽の時間以外には訪れる機会がない。

放課後の音楽科棟の1階廊下。

両サイドは教室のため、照明が落とされている廊下は、少し暗いが、教室の磨りガラス越しに入る明かりのため不便なほどでも

ない。

時折すれ違う生徒の制服のリボンやネクタイは、みんな音楽科のカラーであるブルー。

当然私のように普通科を示す赤いリボンをしている人間は他にいないわけで。

なんか場違いな空気に少し緊張しながら、私はピアノ室のドアにある小さなはめ込み式のガラス窓を覗きながら、浩平の姿を探した。

3つ目の窓を覗き込むと、目の前にストレートの長い黒髪が見えた。

その向こうにグランドピアノと向き合う見慣れた横顔が見える。

神崎さんと浩平だ。

神崎さんはバイオリンを胸の前で抱えている。

ちょうど休憩中だと思った私は扉をノックしようと、右手を上げ、ふと手を止めた。

思い詰めたような声が聞こえたからだ。

「：橘君には迷惑かもしれないけど、さ」

神崎さんのくぐもった声。

スライド式の扉が5cmほど開いている。

「私、今日、やっぱり橘君のことあきらめたくないって思った」

浩平のことをあきらめたくない———どういふことなんだろう？
全身が耳になったみたいにサッと緊張する。

「この3年間、橘君の良い友達になろうと、私なりにかなり頑張ってきたつもり。橘君が幸せなら別に私が一番でなくてもいいと思ってたし、困らせたくなかったし。でも、こんな中途半端な状態は良

くないと思った。私にとっても、橘君にとっても。……3年前告った時と、私の気持ちは変わってないから――」

何？　これ――！？

私は反射的に扉の前を離れて、踵を返す。

心臓がドキドキしている。

一刻もこの場を去ってしまいたかった。

私は薄暗い廊下を引き返しながら、ポケットから携帯を取り出し、浩平にメールをする。

『図書館にいる』

それだけ打って送信した。

その直後、突然大音響で鳴り出した自分の携帯の着信音に、ギョッと飛び上がる。

電源を切ろうとしてうまくいかず、私は制服のブレザーのポケットに携帯を突っ込むと、両手でそれを押さえつけ、ダッシュでその場を去った。

* * * * *

普通科棟、美術科棟、音楽科棟を繋ぐ校庭のほぼ真ん中あたりに共同図書館はある。

課題を調べたり、本を読んだり、自習をする生徒で、テーブル席はほぼ満杯状態だった。

雪は積もることなく止んでいたが、空はどんよりと曇り、気温は午後になっても上がらなかった。

間違いなく、今年一番の寒さ。

それゆえ、暖房の効いた図書館で時間を過ごす者は、いつもより多いのだろう。

仕方なく、私は鞆を手に書架のあたりをブラブラした。

『文学』の書棚で2、3冊パラパラとページを捲っては元に戻る。
『社会』『政治』『経済』：書棚のプレートを眺めながら、足は何となく奥の書棚に向かう。

ふと『美術』の棚の前で足が止まった。

『橘桐人^{たちはな・きりと}』について、美大在学中から色々な作品展に入選して、結構将来の期待もされていたらしいけど、若くして亡くなっちゃったんだって…』

今朝の浩平の言葉を思い出す。

若くして亡くなっても色々な作品展に入選している画家ならば、もしかしたら文献の片隅にでも「橘桐人」の名が書かれているかもしれない。

私は『美術』のコーナーにある本の背表紙を眺めていく。

「画家別 近代日本絵画」という結構分厚い専門書に目がとまった。
手を伸ばすが、上方の棚にあるその本には届かない。

背伸びをしたら、かろうじて背表紙に指が触れたが、ピョンピョンその場で跳んでみても、隙間無く並べられた本の1冊を抜き出すことは難しかった。

諦めかけた時、「この本、見たいの？」と声がした。

私の背後から延びた手が、軽々とその本を抜き出し、目の前に差し出す。

「ありがとう」

振り向いた私は、礼を言ってその本を受け取った。

「どういたしまして」

声の主は目を細めると、私の瞳を覗き込んだ。
ドキッとする。

意志の強そうな茶色の瞳を隠すように延びた色素の薄いサラッと
した前髪。

160cmの私より、さらに20cmは背が高い。
まるで女性のような、端正な顔立ちをしている男子生徒。

「君……朝、松葉杖の男の子と一緒に登校してた子だね」

「え…？」

「ちょうど雪が降ってきて、君、掌を差し出して舞い降りてきた雪、
受け止めてたでしょ？」

「……」

「すごく印象的な光景だったから、覚えてる。いいなと思って」

いいなと思ってって——彼の言葉に過剰に反応する。

慣れてないシチュエーションに、私は恥ずかしくなって、頬を染
めて俯いた。

彼はそんな私の様子を見て、「まずい」と思ったのかもしれない。

「あっ！ ナンパとかそんなじゃ無いから。ほら、僕、美術科で
絵を描いているような人間だから、絵になる構図っていうの？ そ

ういうのについ敏感だったりするわけで…」

確かに彼の制服のタイは緑。それは美術科の生徒であることを示していた。

彼の慌てように、思わず笑みが零れる。

彼もホッとしたように微笑むと、言葉を継いだ。

「…で、その時も思ったんだけど…どっかで会ったことない？　僕たち」

「は？」

「なんか以前会ったことがあるような気がするんだけど、思い出せなくてさ。ねえ、名前教えてくれない？　僕の名前は大沢桐人^{おおさわ・きりと}」

桐人！…琴音さんの恋人と同じ名前だ。

琴音さんが亡くなって、後を追うみたいに死んだ若き画家の名前。

その時、私は何気なく思い出していた。

浩平の家の蔵にあったスケッチブックの荒々しい文字。

『琴音、おまえをあきらめない——』

桐人さんは、私が名乗った川瀬早希という名前には覚えがないようだった。

そのまま、私は苦笑いをしつつもう一度お礼を言くと、彼は爽やかな表情を浮かべ、他の書架に移って行った。

私は空いた席に腰を落ち着け、「画家別　近代日本絵画」に没頭した。

神崎さんと浩平の事が気になって、気になる自分が許せないよう

な気持ちがある。

振り切るように、かなり厚い文献の中に“橘桐人”の名前を捜す。

練習を終えた浩平が図書館に来て、私の傍らに近づき、この肩に手を置くまで。余計なことは考えなくていいように。

だけど、その文献に、橘桐人の名前を見つけることはできなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

学校からの帰り道。

二人分の鞆を重ねて胸の前で持ち、松葉杖の浩平の速度に合わせてゆっくり歩く。

気まずい。

私は神崎さんのことを気にしていた。

あの告白の後、浩平はなんと返事をしたんだろう。

浩平がいつものように話しかけても、私は上の空で、当然会話は長続きしない。

彼がチラチラ横目で私を見ているのには気づいていたけど、器用に何事もなかったように振る舞うことはできなくて。

「俺、歩くの疲れた。ちょっとここで休憩しない？」

浩平は私を振り向くと、道路端のカフェを指さした。

「…でなに注文する？ クリームソーダ？」

窓際の席に向き合って腰を落ち着けると、浩平はメニュー片手に私に尋ねる。

年下のくせに、なんか私のこと子ども扱いしてない？

私はカチンときて、「自分で選ぶ」と素っ気なく言うと、浩平からメニューを受け取った。

一通りメニューを目で追ったが。

「…えっとお…やっぱ、クリームソーダ…」

私がメニューを返ししながら、小さな声で呟くと、浩平はクスリと笑って、クリームソーダとコーヒーを注文した。

「で、何が言いたいの？ 俺に」

「べ、別に…言いたいことなんかないもん！」

ふーんと言いながら、浩平は目を逸らさず、俯く私の瞳の奥をじっと覗き込む。

私はこのまっすぐ射抜くような浩平の目に弱かった。
はぁ…とため息をついて、観念する。

「…今日、浩平、告られてたよね？」

「……告られてたって、どれのこと？」

私は弾けるように顔を上げ、浩平の顔を見た。

どれって!?

1日に何回も、女の子に告白されたりしてるってこと?

『浩平君って、もてるよー』

杏子の言葉を思い出す。

『空手で、1年で全国狙えるってだけでもかっこいいのに、ルックスも性格も特に欠点ないじゃん。今まで彼女がいなくて方が不思議じゃない?』

それは私も認めるけど、浩平は今まで告白されたなんて、ただの1度も私に話したことなんて無いわけで。

だから、私も浩平がもてると聞いても、リアルな話とは、全然受け取ってなかったわけで…。

ま、もちろん浩平が私に『恋愛相談』なんてする柄じゃないのはわかってる。

だけど、ホント青天の霹靂ってヤツ?

今朝の杏子の忠告にも関わらず、まるっきり心構えのなかった私は、かなり真剣にパニックってしまった。

「…神崎さん、前から浩平のこと、さ…えっと…その…」

「……やっぱり早希、あの時間聞いていたんだ。あの着メロ、そうじゃないかと思ったよ」

“海の見える街”だっけ? 「魔女の宅急便」の挿入歌? 今時の女子高生で早希と同じ着メロのヤツっていないよなあ、なんて言

ってる。

放っておいてよ！ 私、宮崎アニメのファンなんだから！
って、今は私の着メロが問題なんじゃなくて―――。

「別に、わざと盗み聞きしたわけじゃないんだからね。たまたま聞こえたんだから！」

頬が熱をもっているのがわかる。

たぶん…というか間違はなく、今私は真っ赤になっているに違いない。

「わかってるよ。早希が盗み聞きするようなヤツじゃないってことぐらい。俺たち、物心ついてから、一体何年の付き合いなのさ」

浩平は何か面白いものでも見るように、ニヤニヤしながら私を見た。

「神崎には友達としてしか付き合えないって返事した」

「……」

「他の誰に告られても、返事は同じ」

「……」

「だって、俺、好きなヤツ、いるもん」

「…え!？」

一呼吸おいて、私はもう一度「ええゝゝゝっっ！！？」と叫んだ。

しかも驚愕のあまり、浩平を指さして。

「でも、でも：私、そんな話、聞いたこと無いよ」

「そりゃあ、誰にも話したこと無いもん」

注文したクリームソーダとコーヒーがテーブルに置かれ、少し会話が中断した。

浩平はいつも通りブラックのまま、コーヒーカップを口元に運ぶ。だけど、私はクリームソーダを味わうような気分じゃなくて。

「誰？ 相手の人：」

「……秘密」

「……」

「…気になる？」

「——……」

『早希は浩平君の側にいるの、あたりまえのように思ってるけど、彼女ができたならそういうわけにもいかなくなると思う』

杏子の言葉が急に現実味を帯びてきた——。

4、前世の悲劇

「どうしたの？なんか元気ないじゃん」

「ん……夜眠れなくて。あれから同じ夢ばかり見るの。琴音さんの夢」

学校へ向かう道、問いかける浩平にポロツと本当のことを零し、とたんに関悔した。

だって、浩平の瞳がとたんに翳ってしまったから。

こんな言葉を言えば、浩平が心配するのは分り切っていたのに。

自己嫌悪。

二人を取り巻く空気が沈殿していく。

『俺はお前をあきらめない』

夢の中の人は、毎夜同じ言葉を私に囁く。

夢の中で私は琴音さんに同化している。

声の主はたぶん橘桐人という人。琴音さんの恋人で画家の卵だった人。

妙にリアルな夢。

その声が、あまりに張り裂けるような悲しさに溢れて、私は夜中に何度も目が覚めてしまう。

私の心の芯の部分が声に応えようとして、平静ではいられなくなる。

切なくて眠れなくなる。

完全な睡眠不足だった。

「……早希はどうするのがいい？」

「え？」

「橘桐人のこと、もっと知りたい？ それとももう触れないで欲しい？」

「……」

「もっと知りたいのなら、……心当たりがないわけでもない。どうする？」

「……浩平も一緒にいてくれる？」

「当たり前だろ」

「……じゃあ、知りたい」

正直、知るのは何だか怖い。

だけど、中途半端なままだと、琴音さんと桐人さんの事が心の端っこに引っかかって、いつまでも魘されるような気がしたから。

オーケーと浩平は呟くと、私の頭をポンポンと軽く叩く。

昔から私が不安なとき、彼は何も言わず、こうして頭を軽く叩くのだ。

大丈夫っていうように。

すると私は何だか安心する。

小さく微笑みを返すと、浩平もニヤツと笑った。

その時。

「橘君、おはよ！」

浩平の横に、その肩をポンと叩いて微笑む神崎さんがいた。

ギョツとする。

『神崎には友達としてしか付き合えないって返事した』

先日の浩平の言葉を思い出す。

「あ、おはよ」

浩平も以前と全然変わらない反応を返す。

「川瀬先輩も、おはようございます！」

花のような笑顔。神崎さんは私には敬語を使う。

「お、おはよう…」

「私だけちょっと上擦った声。」

ダメじゃん。当事者の二人が平気なのに、第3者の私が緊張してどうする??

「私、あれから家でもちよつと練習してみたんだけど、あのアレグロの部分ね……」

神崎さんの言葉をきっかけに、二人は『卒業生を送る会』での演奏の話に夢中になっていった。

一見、以前と変わらない二人のスタンス。

神崎さんは話の合間に切なそうに、だけど嬉しそうに微笑む。

その笑顔を見て、私は悟ってしまった。

きっと神崎さんは友達のパポジションでも、浩平の側にいることにしたんだ。

変なプライドに縛られるよりも。

それは、彼女が本当に浩平のことが大好きだと示しているように思う。

女の私でも、かわいいと思う神崎さん。

だけど、浩平は他に好きな人がいるという。

浩平は今まで、女の子に興味がないような感じだったから、そんなこと、今まで考えたことがなかったけれど。

二人の話に交われない私は所在なげに空を見上げる。

桜の枝が、寒々しい裸の腕を空に向かって伸ばしている。

春には見上げる空が一面うす桃色に染まる。

去年の春、入学したばかりの浩平と二人で、その空を見上げたことが今では夢のようだ。

この数日間で、あんなに側にあった浩平の存在が、ずいぶん遠くなったような気がした。

放課後。

浩平の練習がある日は、私は図書館で待つのが暗黙の了解になっていた。

椅子に座り、恋愛小説に没頭していた私に、セッションの練習を終えた浩平が声を掛ける。

「早希、おまたせ。今日、帰りちょっと寄り道していい？」

「う…うん！ い…いよっ！」

小説の主人公に感情移入して瞳がウルウルしていた私は、あわてて俯いて本を鞆にしまう。

浩平は少し目を細め、優しい笑みを浮かべた。

「ちょっと道場によって師範に挨拶していきたい。しばらく練習休むことになるし…」

浩平は小学校に入学した頃から、林派系東流の空手道場に週3日通っている。

中学の頃から頭角を現し、数々の大会で入賞を果たした浩平は、高校に入学するや待ちかまえていた空手部に勧誘され部活にも席を置く。

しかし、浩平自身は部活とは違う道場の雰囲気や、師範や師範代の人柄などが居心地が良いようで、道場も手を抜いている感じではなかった。

浩平は、師範に捻挫が完治するまで道場を休むことを告げると、道場の隅で稽古の様子をしばらく見学することにしたようだった。師範代と呼ばれる40歳前後の男の人が、白や黄・青・緑・茶・黒と色とりどりの帯を身につけた小中学生らしき子ども達の型を見ている。

手持ちぶさたな私に、師範が声をかける。

「しかし…残念だなあ。今度の大会の結果、良い線行くかと楽しみにしてたんだけど」

「…すみません…」

「あはは…残念がっているのは僕だけでね。浩平自身は別に試合に出られなくても全然平気なヤツだから、早希ちゃんは気にしないで、ね」

顔を上げた私に師範は穏やかな笑みを見せる。

身長は180cmはあるだろうか。がっしりした身体に白髪交じりの髪と髭。

だけど、とても優しい目をしている。

「うーん、浩平は昔から試合とかに頓着しない質だから。かと言って、空手が好きでたまらないってんでもないんだな。その点欲がないというか…」

「？」

「どちらかというと、ピアノを弾いている方が、浩平は好きなんじゃないのかな。たぶん空手を続けている理由は別の所にあるんだろうね」

「別の所？」

「道場に通い出した、小学校に入学したばかりの頃は、とにかく強くなりたい。強くならなきゃいけないなんて言ってた。『大事なモノを守るために』とか？　なんかませた子どもだったよな。今も同じ気持ちかどうかは知らないけど」

「師範！！」

「いらないことを早希に吹き込まないで下さい」と、浩平が会話に割って入った。

心なしか頬が赤い。こんな動揺している浩平はちょっと珍しい。

師範代さんが組み手の指示を出している。

防具を付け、二人一組になり、基本動作に入ろうとするとき、ザワツとみんなに緊張の色が走った。

道場の入口に胴衣を着た老人が立っていた。

帯の色はくたびれたような、使い込んだ黒色。

「宗師だ。師範のおじいさんに当たる人なんだけどね。ちょうど良かった」

浩平は囁くと、私に付いてくるよう促し、宗師と呼ぶ老人に挨拶をした。

「宗師！　ご無沙汰してます」

「おお、浩平か。なんだその松葉杖は？　それに私は今は隠居の身

じゃから、いい加減『宗師』と呼ぶのは、勘弁してくれんかね？」

宗師は俺にとって、ずっと宗師ですから、と浩平は笑った。

しかし、穏やかな老人の視線が私の顔に移ったとき、その眼が驚きに瞳られた。

「俺の幼なじみですが：誰かに似ていますか？」

そのまま探るような目を向けた老人に、浩平は畳みかけるように言葉を続けた。

「琴音さん：とか？ 宗師はご存じなんですか？」

道場に隣接した宗師の屋敷の離れに通された私と浩平は、8畳ほどの和室で、座卓を挟み、宗師と向かい合っていた。

「さっきは本当に瓜二つだと思ったが、こうしてじっくり見ると、やはりだいぶ違うようじゃな」

老人が優しい目を私に向ける。

「あなたは明るくて元気で、健康で。だけど、琴音さんは病弱だったせいもあるが、大人しくて、滅多に笑顔も見せない。夢げで、若いのに既に人生を諦めているような、そんな感じのする人だったよ。だけど、優しい人だった。わしら幼い子どもの話にも真剣に耳を傾けてくれて、時々はお菓子をもらったような記憶もあるよ」

老人は遠い瞳で、自分が幼い頃、見知った話をポツリポツリと話し始めた。

琴音さんは近所に住む女学生だったそうだ。

そんな琴音さんに美大を出たばかりの橘桐人が恋をした。

「琴音さんは大人に対しては人見知りが強く、なかなかうち解けない人だった。」

桐人さんは絵を描く以外全く不器用な人だったけど、優しくて誠実な人だったからね……」

琴音さんが断り切れず桐人さんの絵のモデルを引き受けたのを切っ掛けに、時間を重ね、琴音さんも桐人さんに心を開き、惹かれるようになっていったらしい。

そして、琴音さんの卒業を待って、二人は婚約した。

子どもの目から見ても、二人はお似合いで、こんな幸せそうなカップルは見たことなかったと老人は微笑んだ。

だけど、婚約を発表したその夜――。

「桐人さんがちょっと側を離れた隙に、琴音さんは男に刺されたんだ。琴音さんに一方的に片思いしていた男に。今で言う“ストーカー”だね。急いで病院に運ばれたけど、琴音さんは助からなかった。犯人はその場で逮捕されたが、桐人さんの憔悴は気の毒なほどだった。……その後、琴音さんの満中陰の法要を待たずに、桐人さんも亡くなった……」

その冬一番の寒さを記録した朝、桐人さんは自宅のすぐ近くの路上で眠るように冷たくなった姿で発見された。

泥酔による凍死ということだったけど、消極的な自殺だと思ったと、老人は言葉を結んだ。

誰も何も話さなかった。

浩平がそつと私にハンカチを握らせた。

気づいてなかったけど、私はずっと涙を流していたのだった。

浩平を家まで送る帰り道。

「……ごめんな」

彼が私の顔を覗き込む。

「宗師ってしっかりしてるけど、ああ見えて90才近い人だから、きっと大叔父の桐人さんや琴音さんのことも知ってるんじゃないかと見当はつけていたんだ。でも、あんな話聞いて、良かったのか、悪かったのか。早希が余計に眠れなくなったら、俺のせいだよな」

大きなため息をつく浩平に、慌てて私は答える。

「そんなことない。私が知りたいって言ったんだし…」

「…ただ、大叔父は本当に琴音さんが大好きで、大切に思っていた訳だから……琴音さんに似た早希のことも困らせたり、苦しめたりするなんて事、ないと思うんだ」

「うん……」

「身内の欲目じゃなく、これに関しては、俺、なんか確信みたいなものがある」

家の前に着き、私が差し出した鞆を受け取ると、浩平は私にちよつと待ってと玄関に消えた。

しばらくして戻ってきた浩平の手には桐人さんのスケッチブックがあった。

「これ、早希が持ってるよ。なんかそれが一番良いように思うから」
もう9時に近い時間だった。

浩平の家と私の家はそれほど離れているわけではないので、一人で帰れると言ったが、浩平は遅いから送っていくときかなかった。

浩平から預かった古いスケッチブックは、どのページも琴音さんでいっぱいだった。

戸惑ったような表情の琴音さん。

拗ねたような表情の琴音さん。

はにかんだ表情の琴音さん。

嬉しそうに微笑む琴音さん……。

まるで自分の肖像画を眺めているみたいな錯覚に陥る。

『大人しくて、滅多に笑顔も見せない。儂げで、若いのに既に人生を諦めているような、そんな感じのする人』と宗師は琴音さんの印象を語っていたが、スケッチブックの琴音さんは構えたところがなくて、安心しきったような表情を見せている。

それは、そのまま橘桐人に向けた信頼の印。

橘桐人に向けた愛情の印――。

繊細で優しさに溢れたタッチは、そんな琴音さんの表情を受け止める桐人さんの人柄を表しているように感じた。

突然、先日図書館で出会った大沢桐人の端正な顔を思い出す。橘桐人と同じ名前で。

同じ高校の美術科で絵を描いていると言っていた生徒の。そして、以前会ったことがないかと私に聞いた彼の顔を。

ベッドに横になりながら、またスケッチブックを開く。懐かしいような、優しい気持ちになる。

そのままいつの間にか眠りに落ちた私は、朝目が覚めるまで久しぶりに夢も見なかった。

5、切ない抱擁

いつものように、私は図書館で浩平の練習が終わるのを待っていた。

まだ1月末だ。

外は厳しい寒さが続いていたが、図書館内はエアコンで程良い気温が保たれていた。

心地良くて、浩平を待ちながら、うとうとうたた寝をしてしまう。

ふと目が覚めたとき、テーブルにおいてあったはずのスケッチブックがない事に気づいた。

ガバツと身を起こした私が辺りをキョロキョロすると、「あ、ごめん」という声がした。

私の隣の椅子に、端正な顔をこちらに向けている人物がいた。

大沢桐人だった。

その手にはページを開かれた、橘桐人のスケッチブックがある。

彼は少し決まり悪そうに、言葉を継いだ。

「スケッチブックの表紙に『桐人』って、僕の名前が書いていたから。僕の名前って変わってるし、同名の人がいるとは思わなくて。ちょっと興味を惹かれて、見てしまった。これ、君のスケッチブック？」

古いスケッチブックの表紙には、漢字で『桐人』と書かれている。たぶん持ち主であった橘桐人による癖のある、まるで墨絵の一部のような文字が。

「このスケッチブック、同じ女性でいっぱいだね。これは君？」

「…ううん」

私は首を横に振り、否定する。

「…琴音、おまえをあきらめない」

ポツリとこぼれ落ちた言葉に、ハツとして顔を上げる。

大沢桐人と視線が絡んだ。口角が僅かに上がって笑みを作る。スケッチブックにそう書いてあったからねと、桐人は言った。

「…琴音って…このモデルの名？ 君にそっくりだけど、姉妹とか？」

一つ目の問いは正解だが、二つ目の問いは間違っている。

私は少し首を傾げて答えた。

「琴音さんは、もう…ずっと昔に亡くなった人。私も会ったことがない人だから…」

「ふーん。赤の他人でこんなに似てるんだ。まるで生まれ変わりみたいだね？」

ドキンと気持ちちが跳ね上がる。

大沢桐人が言ったのは、琴音の事を知ってからずっと心の中で考えていたことだった。

なぜ琴音と私がこんなによく似ているのか。

なぜ琴音が亡くなる時の瞬間をリアルに夢で見るのか。

『生まれ変わり』という理由でも与えなければ、説明できないよう

な気がしていた。

「このスケッチ見てびっくりしたよ。心の琴線に触れる描き方というか……僕に大事な人ができたら、こんなふうに描きたいと思わせるような描き方だと思った」

桐人はそのまま僅かに目を細めて、真剣な表情でスケッチブックのデッサンを眺めている。

それから徐に私を振り向いた。

「ねえ、このスケッチブック、ちょっと借りられないだろうか？」

「え？」

「僕も美術科の学生だし、すごく…惹かれるんだ。この絵に。一日でも良いから、じっくり見せてもらえないだろうか」

「でも…」

私の声に重なって、良く知った声がした。

「ダメだよ——」

いつの間にか浩平が私の後ろにいて、サッとスケッチブックをその手に取り上げた。

「このスケッチブックの持ち主は僕だからね」

桐人が陰しい目で浩平を見上げる。浩平は平然と涼しい顔で桐人を見据える。

「君は？ 川瀬さんの彼氏かなにか？」

桐人はちらりと私に視線を移した。

「ち：ちがいます！」

上擦った声で私は否定した。

温和な浩平には珍しく、初対面であろう桐人に対し、友好的に振舞おうとは微塵も感じていないようで、それが態度に表れていた。物心ついたときから傍にいた浩平だが、こんな浩平は珍しい。

「俺の名は橘浩平。早希とは：“彼氏”なんかより、深い繋がりかもな」

浩平が薄く笑いを浮かべたまま、言葉を落とす。

私はカッと頬が熱くなるのを感じた。真っ赤になってしまったのに違いない。

別に桐人を怒らせても構わない。浩平の態度からはそんな気持ちを感じられた。

「それより、人の名を聞きたいなら、まず自分が名乗るべきじゃないの？」

浩平も桐人も大きな声を出している訳ではなかったが、二人を取り巻く空気は最初からピリピリと張りつめている。

下校に近い時間帯だったため、図書室のテーブル席には空席が多い。

私の近くのテーブルで本を読んだり、自習をしたりしてた生徒達が、興味本位にこちらに視線を向けているのを感じる。

私はどうすれば良いか分からなくて、ハラハラしていた。

「…僕の名前はおおさわ きりと大沢桐人。美術科の2年生だよ」

「きりと桐人？」

「そう。川瀬さんも初めて僕の名前を聞いたとき、すごく驚いたみたいだったけど…。そんなに変わった名前なのかな？」

浩平がムツとした顔をした。

桐人はくすりと笑うと、私の耳に顔を近づけた。

そして私にだけ聞こえるような小さな声で囁いた。

「早希、君をあきらめない——」

驚いて顔を上げる私に、「…なんてね」と桐人はニッコリ笑顔をを見せて、席を立った。

「……またね。川瀬早希ちゃん…」

そう私に言葉を残して。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

その日は整形外科の通院日だったため、浩平に付き添って病院を出た頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

浩平は以前は自転車通学だったのだが、ケガをしてからは電車を利用している。

最寄り駅から浩平の自宅まで15分ほどの道のりを、いつものように二人分の鞆を持ち、並んで歩いた。

帰り道、浩平はずっと口数が少なかった。

放課後、桐人と図書室で会ってから、なんだか変だった。

もうすぐ浩平の家に着く。

私はこのまま気まずい思いのまま、別れるのは嫌だと思った。

「まだ怒ってるの？」

「……」

「…眉間に皺が寄ったまま固まっちゃって、変な顔になっちゃうよ」

「——どうせ変な顔だよ」

浩平がむっと拗ねたような顔をこちらに向ける。

「浩平らしくなかったよ、今日。最初からけんか腰で、さ」

「…あいつ、気に入らねえもん。仲良くしようなんて気、さらさらないし」

浩平が他人に対しこんなに攻撃的なのは初めて見る。

「早希は、あいつの肩持つの？」

浩平が苛つく感情を瞳に忍ばせながら、私を覗き込むようにして尋ねる。

「そんなつもりはないよ…。でもね」

どうして、浩平がこんなに怒っているのか、首をひねってしまう。いつも私たち二人の間に流れている空気はもつと穏やかで、優しくて。

どうしたらいつもの浩平に戻ってくれるのだろう。長い付き合いだから、頭ごなしに言っても逆効果なのはわかっている。

こういう時は…。

私は真っ直ぐ浩平に視線を返し、微笑んだ。

「今夜は…月がすごく綺麗だよ。気づいてた？」

浩平がハッとして、空を見上る。

冬の夜空に凍てついた満月が掛かっていた。

冷たく澄んだ空気を通して、月は煌々と輝いていた。

「…なんだか、お月様から銀の粉が降っているみたい。建物にも街路樹にも道路にも、静かに降り積もってるようだと思わない？」

私の言葉に、浩平の顔がゆっくりと穏やかな表情を取り戻す。身体から力が抜けていくのがわかった。

「相変わらず、乙女チックな表現…。」

クスリと笑うと、ひっそりと小さな声で呟いた。

「だけど…ホントに綺麗な月だな。俺、気づかなかった…」

しばらく無言で歩く。

浩平の尖ったような雰囲気失せ、私はホッとする。

「良かったね、経過が順調で。お医者さんも回復が早いとびっくりしてたね」

「…うん」

「添え木も取れて、包帯も取れて。まだテーピングで固定しなくちゃいけないけど、ぱっと見た感じじゃ、ケガもあまりわからないよね」

「……」

「この調子で治れば、空手の試合、間に合うかも…？」

「…バカ」

バカと言われて、ムッとする。

そんな私の様子を、浩平は無視する。

「師範が話してたんじゃないの？俺、試合とかに執着ないって、あれ本当だし」

浩平が心底呆れたような声を出した。

「それに元々1年じゃ、俺の他に試合に出るヤツなんていなかったから。…：代わりに2年の先輩が出られるようになって、なんかホッとしてたりして。まあ、俺には来年も再来年もあるんだし」

だから、早希は本当に気にするなと、浩平は私の頭をクシャツと撫でた。

師範さんの話が出て、そう言えばと私は思いだした。

「師範さんが言ってたけど、浩平は何か『大事なモノを守るため』に空手を始めたんだって？ 私、そんな話、聞いたことないけど」

「俺も言ったことないもん」

「今もそのために、空手続けてるの？」

浩平は少し俯いて、こめかみの辺りをポリポリと掻いた。

「…まあ…な」

「ねえ、『大事なモノ』って何？」

浩平はちよつと考え込むようにして、「地球の平和…とか？」と呟く。

「何よ、それ?!」

驚いた私のリアクションに、浩平は、ははは…と豪快に笑った。いつもの浩平だ。

私も嬉しくなって笑った。

いつしか浩平の自宅の門の前に着き、私は浩平に彼の鞆を差し出す。

浩平は急に真面目な顔をして、私の顔を見下ろした。

「：ホントは、俺の『大事なモノ』って、もっとささやかなもんだ。例えば、こんな綺麗な月を、本当に穏やかで優しい気持ちで眺める時間とか。そのために必要なものを守る力を手に入りたい……それが空手を始めた動機かな」

何か抽象的でよくわからない表現。

「浩平ってそんな小さな頃から、そんな難しいことを考えてたんだ。意外」

からかうような私の口調に、浩平は表情を崩すことなく、言葉を継ぐ。

「その気持ちは今も変わらない……」

浩平は差し出された自分の鞆と一緒に、私の手をグイと引いた。バランスを崩して、私は浩平の肩に額を押し当ててる形になる。

浩平の鼓動を感じる。私は脳裏が真っ白になった。

——だから、

「早希：遠くへ行くなよ。ずっとここにいろよ、な？」

声と共に、私の背に回された腕が一瞬力を増す。

今まで気づかなかった浩平の香りが鼻腔をくすぐる。

それから、拘束はゆっくり緩められた。

私は浩平に抗議しようとして、彼の顔を見上げ、言葉を飲んだ。だって、私を見つめる浩平の瞳に、痛いくらい切ない色が浮かん

でいたから。

私は今までそんな切ない瞳を見たことがなかった。

6、放課後の約束

「はい、どうぞ。インスタントだけど」

目の前に、湯気を上げたマグカップが置かれる。
プンとコーヒーのいい香りがする。

「あつ、砂糖もフレッシュも入れたけど、それで良かった？」

「え…そ、それでいいです…ありがとうございます…」

ペコンと頭を下げると、「どういたしまして」と軽い微笑が返ってくる。

男の人なのに、やっぱり綺麗な顔立ちだなあと少し見とれてしまう。

彼の名前はおおさわ きりと大沢桐人。

そして、ここは美術科棟の1教室だったりする。

なぜこういう状況に至ったかと言うと、放課後、いつものように浩平の練習を待つ時間つぶしに図書館を訪れたら、今日は臨時閉館日だったのだ。

ため息をつきながら、練習が終わるまでの1時間半を、どこでどう時間を過ごしたらいいか途方に暮れていたら、偶然会った大沢くん、美術室で待っていたらと声を掛けられた。

どうやら彼は美術科の生徒であるばかりか、放課後のクラブ活動でも絵を描いているらしい。

先日も橘桐人のスケッチブックにすごく興味を引かれていたようだから、よっぽど絵が好きなんだろうなあ。

「あ、あの、他の部員の人は？」

教室には暖房が入れられていて、程良い温度に保たれているが、クラブ活動中には他に誰もいないことが不思議だった。

「ああ。今日はホントはクラブのない日だからね。美術部の活動日は月・水・金だから」

今日は木曜日。

「じゃあ：私のために教室開けてくれたんですか？」

「まあ、それだけじゃないけど。もうすぐ県のコンクールの締め切りだし。今回は見送ろうかとも思っていたんだけど。ちょっと描いてみたい題材も見つかって、さ」

「あ、そうなんですか」

「：早希は、クラブとか入ってないの？」

「え？」

さらりと言ってくれたけど、“早希”なんてファーストネームでいきなり呼び捨てにされたことに激しく動揺する。

大沢桐人は平然とした様子で、クスリと笑った。

「：顔、真っ赤。いけない？ 名前で呼んだら。僕は君とはもっと親しくなりたいと思っているんだけど」

「：いけなくは：ないけど、：でも」

「ほら、あいつだって、君のこと呼び捨てにしてるでしょう？」

あいつって、浩平のことだよな。

「浩平とは幼なじみで、物心ついた頃から姉弟みたいな関係だし…」

「彼がそう呼んでるってことは、別に彼氏じゃなくても、名前で呼んでも良いってことだよな」

「え…？」

「早希も僕をファーストネームで呼んで。僕の名前知ってるよね？」

「き…桐人…くん」

「“くん”はいらないけど…まあ、良しとするか」

結局、押し切られてしまった。

すごく困る。浩平が知ったら、絶対気を悪くする。

「で、早希はクラブには入ってないの？」

「…私は元々帰宅部だから。浩平の足がちゃんと治るまで、登下校付き添う約束なの。だから放課後、練習が終わるまで待ってるだけ」

「ふーん。じゃあ、彼の足が治るまでは、放課後、暇なわけだ」

それっきり、桐人は話を打ち切って、離れた戸棚の画材なんかをチェックしだした。

『早希：遠くへ行くなよ。ずっとここにいろよ、な？』

ふと昨夜の浩平の言葉を思い出す。

あの時感じた浩平の鼓動。回された手の力強さ。

確かに自分は浩平に抱き寄せられていた。

あれはどういう意味だったのか。

今朝、いつものように浩平を迎えに行ったが、何だか変に意識して、初めは言葉も態度もぎこちなかったような気がする。

だけど、昨夜のことは嘘のように、浩平の態度はいつもと全然変わらなくて。

そのうち、私もいつものようにポンポン言葉を返していて。ホッとした。

二人の関係が変わらなくて。壊れなくて――。

急に待ち合わせ場所を変えたので、行き違いがあっではいけない。浩平に居場所を知らせるメールを打つと、私も鞆から化学の教科書を出し宿題を始めた。

宿題が一段落したとき、もう窓の外の景色がオレンジの夕日に染まっているのに気づいた。

携帯を取り出し時間を確認する。

5時35分。

ちょうど浩平の練習が終わったくらいの時間だ。

私は冷めたコーヒーの残りを飲み干すと、勉強道具を鞆にしまい、帰り支度を始めた。

マグカップを教室脇に設置されたシンクでサツと洗う。

桐人は木炭を手に、真剣な表情でイーゼルに立てかけたキャンバスに向かっていた。

「…大沢くん、今日はどうもありがとう」

私は素直に礼を述べる。

「ファーストネームで呼んでって言ったじゃん。でないと話をしないから」

表情を変えず、黙々と手を動かす桐人に、苦笑いを零す。

仕方がないから「桐人くん…」と呼びかける。

「寒い中待たずにすんで助かった。コーヒーもごちそうさま。今度機会があったら、私が奢る…」

マグカップを渡そうと近づいたせいで、キャンバスの絵が目飛び込んできた。

まだ木炭を使ったラフな絵柄だが、桐人が何を描こうとしているのかは理解できて言葉が詰まる。

「…これ、ひょっとして…私？」

キャンバスに描かれているのは、私に似た女の子の横顔だった。悪戯を見つけた子どものような表情で、桐人がクスリと笑った。

「もう帰る時間？ マグカップならその机の上にでも置いておいて。後で片付けるから」

「ちょ、ちょっと待って！」

「別に早希に奢ってもらおうなんて思っていないから。明日の放課後もこの教室に来てくれたら、僕はそれで良い」

「そんなの困る。酷い。無断で勝手に描いちゃうなんて！」

彼の傲慢な様子に、腹がたった。

しかし、真剣に怒る私に、桐人はまるで動じないようだった。

「だって、彼の足が治るまでは、放課後、時間があるんでしょ？」

「…時間があっても、私、絵のモデルなんて困ります」

「いつまで彼の付き添いをするの？」

「…あと、十日くらい、だと思う」

「僕は1週間で描き上げるから。それ以上は迷惑かけない。約束する」

「…でも…」

「描きかけのキャンバスを無駄にしろって言うの？」

瞳を覗き込むように懇願されて、断る言葉が思いつかない。

ああ言えば、こう言う。

人の扱いに慣れている、と思った。

どう言えば断れないのが分かっていて、断られるなんて微塵も考えていない自信満々な態度。

そして私は彼の術中にまんまと嵌ってしまう。

「ねえ、僕を助けると思って、引き受けてよ」

「……——わかった。だけど、1週間って約束、守ってね」

ほうっと一つ、溜息を溢して、私は了承の言葉を呟いていた。

オーケーと満足そうに微笑みながら、桐人の視線が教室のドアに向く。

「さあ、ナイトくんの登場だね。ちょっと遅かったけど——」

ガラリとドアが開けられた。

そこには少し息を切らせて、怒ったような顔をした浩平がいた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ふうん…で、浩平君、今朝ご機嫌ななめだったんだ…」

翌日のお昼休み、教室で杏子とお弁当を頬張りながら、私は桐人の絵のモデルを引き受けることになった経緯を話していた。

「で、今日放課後、行くわけ？ 美術室」

「うん。だって約束だもん」

「大丈夫かなあ」

「大丈夫だって。1週間だけだし」

「……私が心配しているのは、浩平君との事だよ」

杏子が箸をピシッと私に向ける。

どうして、そこで浩平が出てくるのか。

私はムツとして、杏子に反論する。

「別に浩平は関係ないもん。浩平だって神崎さんにピアノの伴奏頼まれて引き受けてるんじゃない。私が頼まれてモデル引き受けても、何も言う資格ないと思う」

「で、それを浩平君に言ったわけね」

「…うん」

「なるほど」

杏子はちよつと考えるようにして、ミートボールを一つ頬張る。
会話が少し途切れた。

「…ひょつとして、神崎さんのこと、気にしてる？」

「え！？ 別に、そんなわけないじゃん」

神崎さんが浩平に告白した場面に遭遇してから、気まずくて、できるだけ二人がいる場所には近づかないようにしている。

朝、浩平と登校しているとき、神崎さんが一緒になることもあったが、そんな時は日直だとか、友達と用事があるとか適当に理由をつけて、先に行くようにしていた。

気にしてないとは言えない。

「浩平君と早希ならお似合いだと思うんだけどなあ。それとも大沢桐人に惹かれてるの？」

「どうしてそんな話になるかなあ。浩平とは幼なじみ以上でもなければ、以下でもないし。桐人くんにも恋愛感情なんてないし。だいたい浩平には神崎さんを振るくらい、好きな人がいるらしいし……」

そう言うと、「それが誰だか見当付かないの？」と杏子が驚いたような顔をする。

えっ？ 杏子はそれが誰だか知っているの？

私は10年以上浩平の近くにいるけど、今までそんな存在考えたこともなかったよ――。

何だか、心が痛い。

それが誰なのかすごく気になるけど、尋ねる勇氣もない。

杏子がこれ以上、浩平とのことを誤解しても困るし。

「それに話を聞いている限りでは、大沢桐人ってかなり強引みたいじゃない。早希って、そういうのに免疫がないから、流されちゃうんじゃないかって心配」

じっと私を見つめる杏子の瞳が、本当に心配を映しているようで、ちよっと心が素直になる。

「ありがと…」

「それに、ね…」

杏子が明らかに言いにくそうに、ちょっと難しい顔をして言葉を続けた。

「…美術科の大沢桐人って、あのルックスで目立つでしょ？ それに頭も切れるみたいで、確かに女の子の評判は高いんだけど。何かダークな噂もチラホラあるようで、さ」

「ダークな噂？」

「うーん…未確認情報なんだけど、繁華街で良からぬ風体の奴らとつるんでいたとか。陰で何か良からぬ事をしているらしい…とか」

「え…」

「だから、気をつけて。早希、気に入られているみたいだけど、あんまり深入りしない方が良さと思う」

積極的な性格の杏子は友人も多く、情報通だ。

だけど、何度か実際に接した桐人は悪い人には見えなかった。

それどころか、浩平と比べたら、ずっと親切で紳士的に見える。

私に似ているという琴音さんに最後まで誠実で、その後を追うように亡くなったという橘桐人と共通点が多く、イメージがダブる。

そんな人が、“良からぬ事”なんかするはずかない。

まあ、杏子の情報網も多い分、正確だとは限らないわけで。

別に深入りなんてするつもりもないしね。

「明日から土・日、お休みだけど、モデルを理由に自宅に来てなんて誘われても、ホイホイついてっちゃダメなんだからね」

尚も心配そうに見つめる杏子に、私は明るく請け負った。

「大丈夫。桐人くんはそんな危ない人じゃないって。それに土・日は約束があるし」

「約束？」

「うん。朋姉ともねえにレポートの清書を手伝って欲しいって、今朝浩平を迎えに行ったら頼まれて、さ」

「朋姉って浩平君のお姉さんの？」

「うん」

朋姉たちばなこと橘朋美ともみは浩平の5つ年上の姉で、現在大学3年生。

兄弟のいない私にとっては、幼少の頃より本当のお姉さんのような憧れの存在。

ぶっきらぼうな浩平と本当に血が繋がっているのかと疑いたくなるほど、美人で、優しく、社交的で、頼りがいのあるお姉さん。

浩平は5つも年上のこの姉に苦手意識はあるようだが、好意を持っていることは間違いない。

昔から仲の良い姉弟なのだ。

その朋美に、「早希ちゃん、助けて」と泣き付かれたのが今朝のことだった。

週明けがレポートの締め切りなのだが全然はかどって無くて、お

まけにその教授は手書きレポートしか受け取らないらしい。

「…で、土曜日は朝から浩平の家に行って、朋姉のレポートの手伝いするつもりだから。念のため、日曜も開けててと言われて、別に予定もないからオーケーしちゃったの。朋姉には昔から可愛がってもらってる恩があるしね」

「…そっか、麗しの兄弟愛だね」

「うん。私にとって、朋姉は本当のお姉さんのようなモンだしね」

「いや、私が言ったのは…そういう意味じゃないんだけど」

「どういう意味か首を傾げる私に、杏子は、

「ま、そういうところが、早希はかわいいんだけどね——」

と、意味ありげに笑った。

7、気になる男の子

『君、掌を差し出して舞い降りてきた雪、受け止めてたでしょ？
——覚えてる。いいなと思って』

『早希、君をあきらめない』

『いけない？ 名前で呼んだら。
僕は君とはもっと親しくなりたいと思っているんだけど』

いきなりだけど、これは“大沢桐人迷言集”。
“迷言集”の意味は、“私を迷わせる言葉集”ってこと。
いつも大沢桐人は熱を帯びた言葉と行動で、私を翻弄する。

隙を付かれて、うろたえたりしないように。
惑わされて、困った状況に陥らないように。

流されながらの絵のモデルの初日。
何度もじぶんに言い聞かせて、私は美術室の扉に手を掛けたのだ。
彼には、浩平と一緒にいるときのような安心感や開放感がない。
他の男の子の口からは絶対に出そうにない言葉の数々。
そんな言葉に振り回されたらダメ。

だけど、意外にその日、大沢桐人はいつものように私に絡むことなく、むしろ素っ気ない感じで私に椅子に座るよう指示すると、黙々とキャンバスに向かった。

必要最低限の言葉しか交わさない。
ちよっと肩すかしの気分だった。

警戒しすぎたのかな。

金曜日だから、当然美術室には他の部員の人たちもいる。遠巻きに自分の絵と取り組みながら、チラチラ視線をこちらに向けてくるのが気になる。

こんな中で、思いつきり動揺するような言葉を掛けられたり、態度を取られたら、ホント困ってしまうだろう。

だから、大沢桐人が淡々とした態度をとり続けるので、ホッとしているのは事実。

だけど、どこかでちよつと寂しいような気持ちも感じる。変だよ。私。

『…どっかで会ったことない？ 僕たち』

『…僕に大事な人ができたら、こんなふうに描きたいと思わせるような描き方だと思った』

この世に魂がある限り、琴音さんを諦めないと囁いた橘桐人。もし、私が琴音さんの生まれ変わりなら、橘桐人の生まれ変わりも存在するのだろうか。

そんなことを考えながら、私は大沢桐人の顔をチラリと盗み見る。同じ名前だからだろうか。

どうしても橘桐人のイメージに、大沢桐人の顔が重なってしまう。だから、素っ気なくされると、寂しく感じるのかもしれない。

「視線！」

突然の大沢桐人の声に、私はビクリとして視線を教室の壁上方に

戻す。

絵のモデルなんて、やっぱり柄じゃない。
ずっと同じ姿勢でいるって、すごく大変。

しかも大沢桐人は俺様口調で、感謝とか労りなんて感情は全く態度に表れてないし。

アルバイトならともかく、これでボランティアなんて、1日目からギブアップしたい気がする。

それに、さりげない他の部員の人たちの視線も、まるで針の筵。

美術科には担当教諭の違う美術部が3つあり、大沢桐人の所属する美術部の部員は10数人いるようだ。

男の子は見たところ3人で、圧倒的に女子が多い。
たぶん誤解してるんだろうな。なんとなく視線が冷たいもん。
わたしだって、好きでモデルをしている訳じゃないんだけど……。

だから、浩平の練習が終わる5時半を時計で確かめた時、ホントに嬉しかった。

「じゃあ、時間だから。大沢君、」

椅子から立ち上がって、声を掛けても、大沢桐人は無視したように、筆を動かし続ける。

「ねえ、大沢君！」

私の鞆は彼の鞆とまとめられて、彼のロッカーに入っている。
彼の反応が無いことに途方に暮れたが、ふと昨日の会話を思い出
し、恐る恐る声を掛ける。

「……桐人くん……」

「あ、もうそんな時間？　じゃあ、早希、今日はここまでにしよう
——」

彼は何もなかったように、私の鞆を取ると、手渡してくれた。
ファーストネームで呼ばないと返事をしないってマジだったんだ
と、ホッと小さくため息をつくとき、私は教室を出た。

そのまま廊下を曲がって、美術科の校舎を出ようとしたところで
声を掛けられた。

「あの…」

振り返ると見覚えがある女の子が二人。

睨むような真剣な顔をして、私を見ている。

さっき美術室で見かけた子達だ。

何って小首を傾げ尋ねると、「大沢君とはどういう関係なの？」
という言葉が返ってきた。

どういう関係って言われても、彼女たちが気にするような関係じ
ゃない。

だけど私が言葉にするより早く、問いへの返事が降ってきた。

「ただの絵のモデル」

視線を上げると、彼女たちの後方に大沢桐人が立っていた。

「どうしてそんなこと、早希に聞くの？」

思いがけなく現れた大沢桐人に問いつめられ、彼女たちはしどろ

もどろになる。

「え…別に…。大沢君が人物画を描くなんて珍しいし…しかも女の子にモデルを頼むなんて初めてだし…」

「そうそう、名前で呼び合ってるし…付き合ってるのかなって、ねえ」

おろおろと答える女の子達に、冷え切った視線が注がれる。

大げさにため息をついて、大沢桐人は言葉を継いだ。

「僕が誰と付き合おうが、君達に何の関係があるの？ 今回のコンクールも諦めていたのに、ようやく描きたい題材を見つけたんだ。彼女が居づらくなってる、モデルを断るようなことになったら…例えば女の子でも、僕は君達を許さないから」

女の子達は大沢桐人に詰られたのがかなりショックだったようで、泣きそうな顔をして大沢桐人に謝罪の言葉もそこそこに、もといた教室の方に駆け去っていった。

その後ろ姿を見送りながら、大沢桐人は苦笑した。

「…あの子達の頭の中には、誰がフリーだとか、誰と誰が付き合ってるとか、そんなことしかないんだ。見栄えばかり気にして…ホント、参ってしまうよ」

彼の冷たい物言いに、私はムツとして言葉を返す。

「そんな言い方ないと思う。あの子達もあなたに好意を持っていて、こんな行動とってしまったんでしょう？」

「……おひとよしだね、早希は。僕が来なければ、君が僕に近づかないよう、彼女たちは君が嫌なこと、傷つくこと、遠慮なしに並べたと思うけど。……それに彼女たちが僕に好意を持ってるって？ 一体僕のどこに好意を持っているんだか。本当の僕の事なんて、何一つ知らないのに」

「だってあの子達は、ずっと同じクラブで、桐人くんのこと見てきた訳でしょう？」

「彼女たちが見てきたのは僕の外見だけだよ」

「……」

「彼女たちだけじゃない。みんな、そう。……別に本当の自分を分かって欲しいとか、青臭い事を思ってる訳じゃないけどね……」

私は何と返事をすればいいのか分からず、難しい顔をしてただ大沢桐人を見返していたのだと思う。

大沢桐人はクスリと笑った。

「早希にもこんな話、するつもりはなかったんだけど。ただ、明日、明後日の休み、モデルの時間がとれるならと思って、都合を聞こうと追いかけてきただけだったんだけど」

「あ…今週末は約束があってダメなんだ…」

明日、明後日は姉妹と約束している。

「……約束ってあいつと？」

「あいつって、浩平？ 違うよ！ 女の人とだよ」

あ：別にこんな言い訳みたいなこと、言わなくても良かったのに。
大沢桐人と話すといつも調子を狂わされて困る。

「：ひょっとして、僕のこと警戒して、適当な理由つけて断ろうと
しているんじゃないよね？」

「そんなこと、しないよ！」

「：だよ。早希はそんな器用なことはできそうじゃないし。まあ、
そんなすれてないところが僕は気に入ってるんだけど…」

大沢桐人が私の顔を凝視する。

少しの表情の変化も見逃さないとでも思っているかのように。

「ふうん。……女の人って言うことは友達って訳でもないんだ。友
達なら女の子って言う方が一般的なものね。年上で親しい女性か：
誰なんだろうね」

まあいいか、と大沢桐人は呟くと「じゃあ、また月曜日に」と踵
を返す。

私の視線を感じたのか、後ろ向きのまま、ヒラヒラと右手を振る。

大沢桐人は頭が切れる。怖いくらい。

それにしても、本当の桐人君って……。

彼は本当の自分を仮面の下に隠しているんだと言うんだろうか。

案外私も、イメージばかり彼に重ねて、彼のこと、何一つ分かっ
てないのかもしれない。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

朋姉のレポートの清書は思ったほど時間が掛からなかった。

土曜日で頼まれた清書が終わると、朋姉はせっかく日曜の予定を空けてくれたのだから、お礼にチーズケーキを焼くからお茶においでと誘ってくれた。

朋姉の作るチーズケーキはまるでプロが作るような本格的な味で、とても美味しいの。

私は大喜びで、約束の日曜日の2時、浩平の家にお邪魔した。

「あっ、早希ちゃん、いらっしやい！ 今、お茶の用意をするから、先にリビングで待ってて。たぶん浩平もいると思うから」

玄関先で、朋姉が明るく私を迎えてくれる。

物心ついたときから、勝手知ってる浩平の家だ。

私はニッコリと頷くと、そのまま上がって広い廊下の先にある扉を開けた。

不意にピアノの音に包まれる。

浩平の家の敷地には、浩平の祖父母が暮らす母屋の横に、浩平達親子4人が暮らす離れがある。

離れも外見は風格のある純和風建築だが、中は随分リフォームされていて、洋室が多い。

リビングはダイニングキッチンに隣接していて、テレビやソファがある一角にランドピアノが置いてある。

浩平が生まれる前から、彼の家にあったそのピアノは、朋姉が中

学生の頃ピアノを止めてからは、浩平専用になっている。
今も、ピアノを弾いているのは浩平だった。

「よっ！」

曲を弾き終わった浩平が私を振り返り、ニコリと笑う。

私は部屋の隅の椅子を運んで、浩平が座るピアノの椅子に並べると、ちょこんと座った。

「『卒業生を送る会』まであと2週間ほどになっちゃったね。そう言えば、私、演奏する曲を聴かせてもらったことない。何て言う曲？ 弾いてみてよ」

「『ヴァイオリン・ソナタ“春”』の第1楽章。でも、バイオリンなしじゃ、聴いてもつまらないだろう？ 早希はベートーベンはあまり好きじゃないし…」

「うーん……。じゃあ、久しぶりにショパン弾いて？」

「オーケー」

浩平は鍵盤の上に手を置くと、ちょっとした間瞳を閉じて、そして徐に弾き始めた。

『ノクターン第2番』。私の好きな曲だ。

キラキラと光を集めたような優しい旋律に包まれる。

この曲は昔、「愛情物語」という映画にも使われた曲。

映画の中で、ピアニストである主人公は白血病に侵され、最後は息子とこの曲のピアノ二重奏を奏でながら息を引き取るのだ。ずっとすれ違い、相容れなかった息子に、自分の愛情を伝えるための曲。それがショパンの『ノクターン第2番』。

浩平のピアノは切ないながらも温かくて、私は目を閉じ、じっと聞き惚れてしまう。

優しい調べに微笑みが漏れる。

しばらくして鳴りやんだピアノの音と、何かの気配にふと目を開けた。

思いがけなく浩平が至近距離で私の顔を覗き込んでいた。

吐息のかかる距離。

不意を付かれ、足下から頭の先まで、一気に熱が駆け上った。

頭の中が初期化されたみたいで、金縛りにあったように動けない。

浩平の手がゆっくりと私の頬にかろうとした時、彼の顔がちょっと歪んだような気がした。

次の瞬間――。

「痛い―――！！！」

額を激痛が走った。

一瞬何が起こったのかと思ったが、要するに浩平が私の額にデコピンをくらわせたのだと悟る。

小学生の頃に、ふざけて時々仕掛けてきたように。

「ちょっと何するのよ！ 突然！」

身体が一気に自由になった。

浩平の気に障るような事をした覚えもない。

額に手を当てながら、猛然と抗議をする私に、浩平は怒ったように「：悪かったよ：」と呟くと、顔を逸らした。

何が何だかわからない。

「あ、びっくりした。ケーキ食べる前に、他のモノ、食べちゃうつ

もりかと思ったわ」

クスクスと笑い声に振り向くと、紅茶とケーキを載せたトレイを手に持った朋姉が立っていた。

「朋姉、浩平ったら酷いんだよ！ 何もしていないのにデコピンしたりするの！」

「フフフ…まあ…私は我が弟ながら、よく我慢したと感心したけどね」

「…ばっ——！！」

朋姉の言葉に、浩平が真っ赤になった。

そのまま立ち上がって、部屋を出ようと朋姉の脇を通り過ぎる。

私は二人の会話についていけなくて、「え、一緒に食べないの？」と浩平の背中に呼びかけた。

「いいの、いいの。キッチンにあんたの分も用意しているから、勝手に食べて」

前半は私に、後半は浩平に、朋姉は言葉をかける。

そして、「久しぶりなんだから。たまには早希ちゃんと女同士、二人でゆっくり話そうよ」と笑顔を見せた。

「あんまり早希に変なことを吹き込むなよ……」

パタンとドアが閉まり、浩平がいなくなると「ホント健気なヤツ

…」と朋姉がため息をついた。

さっきは驚いたけど、私は浩平がいなくなって、ちょっとガツカリする。

もうちょっと、ピアノ聴きたかったのにな……。

朋姉は私の前のテーブルに紅茶とケーキを並べると、私の前に腰を下ろした。

「だけど、早希ちゃんも男の子と二人の時に、あんな無防備な表情したらダメよ。相手が私の彼だったら、きっとキスぐらいじゃ収まらないわ……」

……私の彼？

私の興味は朋姉の注意の内容より、一つの単語に集約される。

「え？ 朋姉はカレ氏いるの？」

「まあね」と、朋姉の返事。

そりゃ、こんな美人で優しい朋姉だもん。カレ氏がない方がおかしいよね。

「どんな人？」っていう私の問いに朋姉は照れたように答える。

「同じ大学の1回生。去年の春に同じサークルに彼が入ってきたのがきっかけかな」

「朋姉は大学3回生だから――」。

「え！？ 年下なの？ 二つも？ なんで？？」

「……確かに年下だけど、仕方がないじゃん。好きになっちゃったんだもん」

私の驚いた様子に、朋姉はちよつと拗ねたような顔をする。

「傍にいたかったし。もつと彼のこと知りたかったし。だから私の方から告ったんだ」

頬を染めポットの紅茶を注いでくれた朋姉の頬が赤くて可愛い。告白されたことはたくさんあるに違いないが、朋姉が告白するなんて珍しい。

よっぽどステキな人なんだろうなと思う。

「早希ちゃんは？ 好きな人とかいないの？ それとも…今でもピアノのお嫁さんになるなんて言ってる訳？」

「何？ それ…」

「ほら、小さい頃。後からピアノ教室に通い出した浩平に早希ちゃんが抜かれちゃった時、からかった私に何て返事したか覚えてないの？」

フルフルと首を振る私に、朋姉はクスリと笑う。

「別に抜かれても平気だって。私はピアノを弾くより聴く方が好きだから、ピアノストと結婚するから良いのって。そしたら毎日ピアノが聴けるからって」

「え？ 私そんなこと言ったの？」

「うん。…そっか、覚えてないのか。それはちよつと切ないなあ…」

「……？」

朋姉がケーキを勧めてくれる。

一口口に入れるとほんのりとしたチーズの甘さが口いっぱい広がる。

やっぱり朋姉の作ったチーズケーキは美味しい。

紅茶はフォーションのアップルティー。

私は、紅茶の中じゃ、これが一番好き。

思わず口元が緩む私を、朋姉は優しく見つめる。

「浩平は…ピアニストを目指していると思うよ」

「ホント？　だけど、高校も普通科だよ？」

「私も普通科を受けると聞いたときはびっくりしたけど…ヤツにはヤツの事情があったんだろうね。そもそもあいつ、中学の担任には北郷高だって大丈夫って言われてたのに。早希ちゃんの通ってる私学を専願で受けるって聞いたときはたまげたわよ」

「え？」

——初耳。

北郷高といえばこの辺りじゃ一番偏差値の高い高校だ。

頭が良いとは思っていたけど…、浩平ったら、そんなこと、一言も言ったことがなかった。

「ところで…早希ちゃんにとって、浩平ってどんな存在？」

「？　何でも相談できる幼なじみ？　年下だけど頼りになるし、一

緒にいと楽しいし、安心するけど…」

「年下っていても1週間違いじゃない。それにしても、浩平のこ
と、安心だとか思ってるんだ…何だか微妙だね」

朋姉がホッとため息をつく。

朋姉も杏子みたいに私と浩平が付き合ったら良いと思っているの
かな。

私は今の距離が一番居心地がいいのに。

「だけど、浩平には好きな女の子がちゃんというんだよ」

「…それって浩平が言ったの？ 早希ちゃんに？」

「告白された女の子にそう言って断ったって…浩平が自分でそう言
ってたもん」

「…あのバカ——」

「早希ちゃんにそんな話をしたら、ややこしくなるだけなのに…」
なんて、ブツブツと朋姉の呟き声が聞こえる。

どういう意味かと考え込む私の表情に気づくと、朋姉は慌てたよ
うに取り繕った。

「いやいや、こっちの話。早希ちゃんはそんなこと気にしないで良
いからね。まあ、全然気にならないってのも寂しいけど…」

一層訳が分からなくなった顔をする私を見て、朋姉はニッコリ笑
い「ホント早希ちゃんってかわいいわー！」と頭を撫でてくれる。

自分の頬が赤くなるのが分かった。

「早希ちゃんは、好きな男の子はいないの？」

「カレ氏になってほしい人って意味なら、いないよ。でも…」

「…気になる男の子はいるんだ？」

「…それがよく分からないの——」

気になる男の子というのは否定しない。

橘桐人と琴音さんの悲恋に同調している私には、同じ桐人という名の大沢桐人の存在が、心の琴線に触れるのも事実だ。

だけど大沢桐人には実際、困っている部分もある。

いいように弄ばれて振り回されているような気がする。

これ以上気持ちや生活をかき乱されるのは怖い。

好きなのかと聞かれれば、よくわからないっていうのが正直な気持ち。

姉妹は私の話を静かに聞いてくれて、だけど物知り顔な助言なんかはしなかった。

「好きっていう気持ちなんて、あんまり難しく考えたらダメよ。すっごく嬉しいとき、悲しいとき、辛いとき、ピンチの時、ふとその人の笑顔が心いっぱい広がったり…って、そんなモノなんじゃないのかな。きっと早希ちゃんの心の中に答えはちゃんとあるんだよ。何かのきっかけで気づくモノだから…」

だから無理しなくて良いから。

優しく微笑んで、そう朋姉は言ってくれた。
気持ち随分軽く、明るくなる。

「ありがとう、朋姉。…朋姉が本当に私のお姉さんなら良かったの
にっと思っよ」

「ホント弟なんていても全然楽しくないし。私だって早希ちゃんが
本当の妹なら良いなって、ずっと思っていたわ。一緒にケーキ作っ
たり、洋服の貸し借りしたり…楽しいだろうな」

フッフ…と可愛く笑いながら、

「……でも、まだあきらめてないけど、ね」

悪戯っ子のような表情でそう言うと、朋姉は軽くウインクした。

8、策略にはまる

日曜日。

朋姉と楽しく過ごした帰り道。

いつものように律儀に家まで送ってくれた浩平が別れ際にポツリと呟いた。

「今週の木曜日まで、絵のモデルやるんだろ？ あいつには気をつけろよ」

「あいつって大沢君？ 大丈夫だよ。悪い人じゃないし」

「…早希って、自分じゃ自覚してないけど、メッチャ隙だらけだから。ホント心配だわ」

「大丈夫だって！」

あの時。

なんだか暗い表情の浩平の背中をバシバシ叩いて、浩平の心配を笑い飛ばした私。

まさか、それから1週間も経たないうちに、浩平の予感が当たって、窮地に追い込まれることになろうとは、その時は全く予想もしていなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

月曜から水曜までは、何事もなく過ぎていった。

月曜と水曜は美術部の活動日だったが、先週絡んできた女の子達も、その後私に接触してくることはなかったし、他の美術部員達は友好的で、居心地悪く感じるようなことはなかった。

むしろ大沢桐人が思ったより親切で、逆に居心地良く感じてしまっただけ。

彼は絵を描きながらも、しきりに私に話しかけてきた。

「早希はどんな音楽が好きなの？」とか、

「早希の好きな食べ物は何？」とか。

どうしてそんなことを聞くのと尋ねたら、「自分の好きなモノを考えている時って、表情が優しくなるでしょう？」とニッコリ微笑んだ。

ああ、私が緊張しているから、気を使ってくれてるんだ。

桐人くんってちょっと俺様キャラだけど、やっぱり基本的にはいい人だね。

単純にそう思ってしまった。

だから油断したのかもしれない。

大沢桐人にモデルになる約束をしてから、ちょうど1週間目の木曜日。

私は美術室で、キャンパスに向かう彼の前で、椅子に腰掛けポーズをとっていた。

美術部は部活のないだから、教室には私達以外の人影はない。

今日で約束の期間が終わることに、内心ホッとする。

「何？ 今日表情が柔らかいね。ひょっとして今日で終わりだなんて安心してる？」

「え？」

凶星を指されて笑顔が引きつった。

「僕としてはちょっとは寂しく思ってたけど。だって、明日からは唯一の会う口実がなくなっちゃうんだよ」

「で…でも最初から1週間の約束だったし…」

「校舎も離れているし、話をするにも口実が必要になる」

「……」

何て答えて良いのかわからない。

私と瓜二つだった琴音の恋人だった橘桐人は大沢桐人と重なる部分が多い。

夢の中で私に「この世に魂があるかぎり、俺はおまえを探し続ける。俺は、おまえをあきらめないから」と囁いた人。

大沢桐人が橘桐人の生まれ変わりなら、私たちは運命の恋人同士なのかもしれない。

だけど、実際私は彼に恋心よりも戸惑いを強く感じているというのが正直な気持ち。

もっと知り合えば、私はこの人のことが好きになるのだろうか。

「あっ！」

突然大沢桐人が声を上げ俯く。

「どうしたの？」

「痛てえ！ 何か目に入ったみたい」

しばらく軽く目を擦っていたが、痛みは治まらないらしく、彼は左目を押さえながら、空いている手で私を手招きした。

「睫毛か何か目に入ったのかなあ。悪いけど、ちょっと見てくれな
い？」

私は大沢桐人に近づくと、屈み込んで彼の瞳を覗き込んだ。

少し涙目になっているようだが、赤くはない。

茶色がかった瞳に私が映っている。

長いまつげ。まるで女の子みたい……。

「見た感じ、何もないようだけど…」

「目尻のあたり。ここがコロコロした感じがする。もっとよく見て」

「うん…」

大沢桐人が指さす辺りをもっとよく見るため、私はさらに顔を近づけ、彼の瞳を覗き込む。

「やっぱり何も見あたらないよ…」

そう呟いたとき、ふと両肩に重みを感じた。

大沢桐人の両手が肩に置かれたのだと察したとき、突然、これ以上ないくらいの至近距離に彼の顔があることに気が付いた。

呼吸を感じる距離。

とたんに顔が熱くなって、パニックになった私は、彼から身を離そうとしたが、両肩に置かれた手がそれを許そうとしない。

彼の目が面白いモノを見るように、スツと細められた。

「ホント楽しいね、早希は」

「え？」

「きつとすごく大事にされて育ったんだろうね、君は。裏も表もなくて、疑うことも知らない」

「……？」

「だから君に惹かれるのかなあ。君は僕にはないものばかり持っているから」

「…き、桐人くん？」

「悪いけど…僕は君みたいに素直じゃない。会う口実がなければ、無理矢理にでも作ってしまうようなヤツなんだよ…」

大沢桐人の最後の言葉が零れた、その刹那。

「大沢君！ 頼まれてたヤツだけど……」

ガラッと美術室の扉が開いて、女の子の甲高い声がした。

背後でハッと息を呑む気配がする。

恐る恐る顔だけで後ろを振り返ると、女の子が三人、呆然とした顔をして、こちらを見ていた。

次の瞬間、彼女たちは「ごめん!」と言い捨てると、ピシッと扉を閉めた。

「誤解されちゃったかな」

大沢桐人がクスリと笑う声を、私は悪い夢を見ているような思いで聞いていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

翌日、いつものように浩平を誘い、彼と一緒に学校へと向かう。浩平の足は、まだテーピングはしているようだが、見た目は全くケガをしたことが分からないくらい回復していた。

「鞆を持ってもらうのはカッコ悪い」と言って、今では浩平は鞆を自分で持っているの、私が付きそう必要もないようだが、お医者様に完治と言われるまでは、と思って一緒に登校している。

その日は、何だかいつもより人の視線を感じるような気がしていた。

全然面識のないような人も、チラチラ私を見ているような？　なんか変だとは感じた。

教室に入ると、杏子が血相を変えて、駆け寄ってきた。

「ねえ早希、大沢桐人と付き合ってるってホント？ あんたったらそんな話今まで一言も…」

「ちょ、ちよっと待ってよ、杏子！」

全然話が見えない。

大沢桐人と付き合うって？ 私が？ モデルの約束も昨日で終わり、その後の約束すらしていないのに、なぜそんな話になるのか。

「だって、昨日、放課後の美術室でキスしてたって噂になってるよ」

キス？

なぜそんな噂が立つのかと考えて、ハツとした。

放課後の美術室と言えば、大沢桐人が目が痛いと言って瞳を覗き込んでいたとき、突然ドアを開けた女生徒がいたっけ。

後ろからあのシーンを見れば、キスをしていたように見えたかもしれない。

「あ、あれはキスじゃないよ。大沢君が目が痛いと言ったから、見てあげてただけ。誤解だって。大沢君に聞けば、嘘だってわかるよ」

「…見た本人達が実際に彼に聞いたらしいよ。でも、否定しなかったってさ。だから、すごい噂になってんじゃない」

「否定しなかったって…なんで？」

何が何だかわからない。

杏子のはあくの一つため息をついた。

「うん、早希の話でおよその流れはわかった。やっぱ曲者だったねえ、大沢桐人。ま、別にやましいところがあるわけじゃなし。堂々としてれば、そのうち噂なんて消えちゃうって」

「うん。…そうだね」

「でも当分はヤツから接触してきても二人きりで会ったらダメだよ。その時は私も一緒に行ってあげるから、さ」

杏子が向けてくれる笑顔が凄く嬉しい。

「ありがとう」

それにしてもこんな噂が浩平の耳に入ったら…って考えると、気が重くなる。

隙だらけだから心配だって言われたばかりだったのに。

何だか浩平の怒った顔ばかり浮かんできて、その日の授業はちつとも頭に入らなかった。

* * * *

放課後。

「じゃあ、明日の試合頑張ってね！」

「ありがと。頑張るわ」

クラブ活動に向かう杏子と教室の前で別れ、以前通り図書館に向かう。

杏子の所属する空手部は、明日三地区合同の大会がある。

私を庇ってケガをしなかったら、浩平も出る予定だった試合だ。

浩平がピアノ伴奏を頼まれた『卒業生を送る会』も来週の水曜日。だから、音合わせができるのも、今日を合わせて後三回しかない。浩平は『卒業生を送る会』が終わったら、医者 of 許可を得て、クラブ活動を再開するつもりだ。

そうしたら、私には浩平と登下校を一緒にする理由がなくなる。あと、何回一緒に帰れるのかなと思うと、少ししんみりした気分になった。

図書室でテーブルについて本を読んでいると、前の席に誰かが座る気配がした。

顔を上げると、今回の騒動の根元、大沢桐人がニッコリ笑顔でこちらを見ていた。

「な、なんで？ 今日にはクラブ活動がある日でしょう？」

「うん。でも、僕に何か言いたいことがあるんじゃないかと思って」

そう、言いたいことはいっぱいある。

「そうよ。変な噂が流れて、すっごく迷惑してるんだから。あなたと私が付き合ってるのか。キ…キ、キ……」

「キスをしたって？」

「そう！ キ、キスしてたなんて間違った噂が…」

「ふうん」

「ふ、ふうんって。そんな噂が流れたら困るでしょ！」

「僕は別に困らないよ。いつそのことホントに付き合っても良いけど？」

「付き合いません！！」

思わず大きな声で怒鳴ってしまい、ハツとする。

そうだ。ここは図書館だった。

恐る恐る周りを見回すところらに向けられているいくつかの冷たい視線。

仕方なくヘラツと愛想笑いで誤魔化して、ペコリと頭を下げる。

それを見て、プツと大沢桐人が吹き出した。

なんて失礼なヤツ。一体誰のせいだと思ってるの！？

私がムツとしていると、「ごめん。…やっぱ早希は面白い。ホント感情を揺さぶってくれる」と彼は左手で顔を覆うようにして、肩を震わせていた。

「だいたい昨日誤解した人達に聞かれたんでしょ？ その時にちゃんと本当の事を言ってくれれば、こんな困ったことにならなかったんじゃない」

「…困ってるの？」

「当たり前でしょ？ 朝から謂われのない好奇の目に晒されて、迷惑してるんだから。なのに面白がってるなんて卑怯だわ！」

「卑怯？ …うーん、そうかもしれないなあ」

大沢桐人は悪びれる様子もなく、シレッとそんなことを呟く。

「だって僕はこういう方法しか知らないから。生まれてからこの方、待っていて欲しいものが手に入ったことなんてないもの。欲しいものがあれば、自分の持つ力と頭、全てを使って手に入れる。ずっとそうやってきたんだ。お金で買えるモノもそうでないモノも、ね」

「そうでないモノって？」

「例えば人の気持ちとか。友達…親の愛情とかも…かな」

「…そんなの、何かおかしい」

「…早希は親にも周りの人にもずっと大事にされてきたから、そう感じるんだって。僕の両親なんて、仕事第一で元々自分が一番可愛い人たちだから。子供は自分の居場所を作るために相当な努力をしなくちゃいけない。そういう家庭もあるって事だよ」

「……兄弟とか…いないの？」

「2歳年上の兄がいるけど…こいつがこの世で一番嫌いだね」

「……」

「って…どうして君が泣くの？」

視界の中で歪んだ大沢桐人が驚いた顔をして私を見つめている。どうしてって聞かれても、私にもわからない。

ただ何だかすごく切なくなってしまった。

「ホント君にはまいるな」と大沢桐人が渡してくれたハンカチを目頭に押し当てる。

「早希も良くも悪くも、これで僕と向き合うしかないわけでしょ？超鈍感な君相手に、気持ちが傾くのを待っていたら、10年かかって無理だね。僕にはあいつみたいな忍耐力はないよ」

「…あいつ？…」

チラリと顔を上げたが、大沢桐人はその問いには触れず、ニヤツと笑うと、「だけど、早希が困るのは僕の本意ではないよ」と囁く。

「…じゃあ、キスしたり、付き合ったりなんて事はないんだから、現実になかったことはちゃんと否定して」

「いいよ。君がそう望むのなら」

私は思ったよりすんなり彼が了承してくれたことに一瞬ホツとする。

だけど、大沢桐人の言葉には続きがあって――――。

「だけど…君の望みを聞くんだから、僕の望みも聞いて欲しいな」

「…桐人くんの望み？」

「うん。：早希のケーバン、教えてよ」

「え？」

「携帯の番号、教えて欲しい」

どうしよう。

杏子が二人で会ったらいけないって言ってたけど、案の定、拙い展開になっているような気がする。

だけど、それで変な噂がなくなってくれるのなら――――。

「：ケーバン教えたら、ホントにちゃんとやってくれる？」

「うん。約束するよ」

私は制服のポケットから携帯を取り出すと、自分のナンバーを表示しようと操作しかけた。

その時。

「ダメだよ」

と、声が降ってきて、私の携帯がサッと取り上げられる。

「：え？ 浩平？」

上を見上げると、浩平が怖い顔をして大沢桐人を睨みつけている所だった。

「なんでここにいるの？ まだ練習始めたくらいの時間でしょ？」

「…今日は用事があるから、中止にしてもらった」

「中止って、あと三日しか練習できないのに。用事って？」

用事があるなんて話、聞いてない。

少なくとも朝別れたときには、いつも通りの待ち合わせをしたはず。

「ひょっとしたら、僕の行動読まれてたかな？」

大沢桐人が薄く笑いながら、口を挟む。

「牧先輩からメールをもらって、多分今日のうちに早希に接触してくると思ってた。教室にいるときは牧先輩のガードがあるからね。たぶん放課後早希が一人にいるときを狙うだろうとは思ってたよ」

「ふーん。なかなか鋭いね」

なるほど。杏子が浩平に連絡してたのか――――。

って、私ってそんなに頼りなく見えるのかな。

まあ、いつも自分で困った状況に陥ってしまうのは事実だけど…。

私を取り留めのないことをグルグル考えているうちに、浩平は私の鞆を自分の鞆と一緒に持つと、「じゃあ、早希、帰るよ」と空いた手で私の手を持ち立ち上がらせる。

「えっ？ 浩平？ ちょっと待って」

「何？」

「だって、桐人くんとの話も途中……」

浩平が眇めた目で私を見る。

今までの長い付き合いから、浩平が完全に怒ってるモードに入っていることを察し、言葉が詰まる。

「……その話はもうこれで終わり。それより、俺も早希に話があるから——」

そうして、そのまま私は浩平に手を引かれ、呆然と引きずられるようにしながら、図書館を後にしたのだった。

9、長い友情の終わり

2人の自宅に近い児童公園。

話があるなんて言いながら、浩平は学校からここに至るまで、一言もしゃべらなかつた。

私の手を掴んだまま、半歩前をズンズン歩いている。

滅多にないくらいの彼の怒りを感じて、私は彼の背中を見上げながら、ただ彼の後を小走りで追う。

ああ、もうすっかり足の調子も良くなったみたいで良かったとか、また少し背が伸びたんじゃないかとか、関係のないことを考えながら。

「…大沢桐人との噂…どこまでがホント？」

浩平は公園のベンチに腰を下ろすと、隣に座るよう目で促した。

「ち、ちがう！ 全部間違い！ あれは…美術室で桐人くんが目が痛いから見てって言われて…見てあげたら、教室入ってきた子がキ…キスしてるって勘違いして…とにかく誤解なの！」

「……」

「桐人くんも誤解、解いてくれるって言ってたし！ 変な噂なんてすぐに…」

「早希が携番教えたら？ そんなのダメだよ。それじゃ、まるつきりあいつの計略に嵌ってるようなもんじゃない」

浩平にスッパリきっぱり言われて、グツと言葉に詰まる。

「で、噂どうこうより早希の正直な気持ちは？ 大沢桐人が好きなの？」

大沢桐人が好き？

浩平にそう聞かれて、キュンと胸が痛んだ。

「そんなの浩平には関係ない」

「関係あるよ。それに大沢のヤツ、これっきり大人しくなるなんて思えない」

「思えないって…それって…どういう…」

「…まあ、早希はあまり気にしないでいいけどね。牧先輩もガードしてくれるだろうし。早希があいつと対等にやり合えるなんて思っていないから。そんな女なら、こんな長い間、引きずったりしないし…」

浩平の想いを示す重要なキーワードは、あまりに容易く浩平の口から零れたが、私はその時その意味をすんなり理解できなかった。

「なんか…こんな事になるような気がしていたんだ」

髪をかき上げそう言ったきり、ふつつりと浩平が黙り込んだ。気まずくて、私もそのまま黙り込む。

まだ明るい日差し of 公園に、子供の笑い声が聞こえる。真剣な顔をしている浩平の前で、時間の確認はできないが、まだ

4時半くらいだろうか。

真冬にしては、穏やかな日だったせいか、まだ滑り台の近くで遊ぶ幼い子ども達の姿、少し離れた鉄棒の傍に、その母親らしい若い女性達の姿が見受けられる。

ふと砂場でプラスチックのスコップで、仲良く砂山を作っている幼稚園くらいの男の子と女の子に目が行く。

すぐく懐かしい光景のような気がした。

幼なじみの浩平と私も幼い頃は同じように、この公園でよく遊んだから。

「俺らも小さい頃、ああやってよく一緒に遊んだよね。覚えてる？」

浩平がポツリと呟く。

浩平が同じ事を考えていたのを知って、少し嬉しくなる。

「うん。あの頃浩平は私の後をいつも付いて回ってたもん。かわいかったよね。守ってあげたいって感じだった」

浩平とは誕生日がたとえ一週間違いでも、学年は私の方が1つ上だったから、必然的に私が姉貴風を吹かせていた。

浩平が他の男の子とケンカをして泣かされて帰ってきたりすると、いつも私が相手に食ってかかったものだった。

あの頃は一緒にいるのが居心地が良くて、自然で。

どうして成長するにしたがって、それが難しくなってしまうのだろうか。

浩平はチラリと私を横目で見ると、もう一度子ども達に視線を戻した。

いつになく真剣な表情の浩平に戸惑う。

「俺は早希のそんな気持ちが悔しくてさ。幼いながらも、守つても
らうより、俺が早希を守りたいって思ってたんだ。だから空手も
始めた。いつも早希には笑っていて欲しかった。早希の一番近くに
いるのはいつも俺でありたかった。強くなればそれが叶うように思
っていた。俺は……」

嫌な予感がした。

その先を聞いてしまったら……今まで築いてきた2人の関係が壊れ
てしまう予感。

かけがえのない物を失ってしまうような予感。

「や、……それ以上言わないで！」

だけど、浩平は私の願いを聞いてくれなかった。

「俺にとって……もうその頃から、早希は……特別な女の子だったんだ」

「やめて！」

「俺は……早希が好きだ。ずっと好きだった」

いつか浩平が言った言葉。

『俺、好きなヤツ、いるもん——』

それが私自身を指すとは考えなかった。

だけど、今思い返せば、私に向けられる眼差しや、さり気ない素
振りや、言葉の中に、時々ハツとするような優しさを感じることは、
確かにあったのだ。

ただ、知らない振りをしてきた。

ずっと目を背けていた。

そんなことに気づきたくなかったから。

浩平の存在は私にとってかけがえのないものだ。

だけど、それは恋じゃない。

私が浩平の気持ちに気が付いて、その想いに応えられなければ、彼は離れていくだろう。

それが怖かった。

私は2人の関係を壊したくなかった。

いつまでも今の状態が続けばいい。

居心地の良い関係を保っていききたい。

ずっとその事だけを願っていた。

「本当はこんなに急ぐ積もりじゃなかった。もっと早希の気持ちを大事にして。待てるつもりだった。：噂なんかがこんなに気になって：こんなに簡単に振り回される自分だとは思わなかった。ホント情けないけど……」

浩平は薄く笑うと、表情を改め、私の顔を覗き込む。

私はその瞳を見返すことができなかった。

「……ねえ、橘桐人や琴音さんに捕らわれずに大沢のことを考えてみて。そして、年下とかに捕らわれずに俺のこと考えて。早希の気持ちはどこにあるの？」

「そ…そんなの、わかんないよ！」

浩平は今まで絶妙のバランスの上にあった、2人の境界線を踏み越えてしまった。

私ももう気づかない振りをするのは許されない。

「浩平のことは大事に思ってる。…だけど、それは恋とかじゃないの…」

「…今はそれでも良い。でも、これから？　ずっと俺には望みはないの？」

浩平の傷ついた瞳の色に、胸がズキンと痛む。

だけど嘘はつけない。嘘を付くことは今以上に浩平を傷つけることになる。

「ダメ。私、浩平のこと…幼なじみ以上には思えない」

声がかすれる。

呼吸が上手くできなくなる。

涙が出そう。

そんな私の頭を、浩平はいつものように大丈夫というように、ポンポンと軽く撫でた。

顔を上げると、浩平が私を真っ直ぐ見つめていた。寂しげに微笑を浮かべながら。

「そっか……わかった」

そしてベンチから立ち上がると、私に背を向けながら、言葉を紡いだ。

「俺、もう足、大丈夫だから。水曜の『卒業生を送る会』の演奏が終わったら、空手も再開するつもりだから。明日から送り迎えはいらない……」

頭を殴られたようなショックを受ける。
でも、震える声を絞り出す。

「でも、でも私達…これからも、仲の良い友達…だよね？」

だけど、浩平は一言「…ごめん」と呟くと、2度と振り返ることなく、私から遠ざかっていく。

私は呆然とその姿を見送りながら、しばらくはベンチから立ち上がれなかった。

* * * *

次の日から全く浩平と会わなくなった。

遠くから姿を見かけることも。声を聞くことも。

今までは私の傍に浩平の姿があることは、珍しいことではなかった。
た。

たわいない話でも、言葉を交わさない日の方が少ないくらいだった。
た。

私は全然気づかなかったが、それは浩平の努力の賜でなかったか
と思に至る。

そして、浩平はもう努力をすることは止めたのだ。

ひょっとしたら私のことを避けているのかも知れない。
そんな自分の考えに、酷く傷つく私があった。

「…おいしい、早希！ 早希ってば！」

杏子が呼ぶ声にハツとする。

窓際の席で、ぼんやり窓の外に視線を彷徨わせていた私は、声の主に注意を向けた。

「…授業、終わったよ…」

気が付くと、教壇に先生はいなくて、みんなガヤガヤと帰り支度をしていた。

杏子は既に支度を終えて、鞆を手に、私の席の前の椅子に横向きに腰掛けていた。

ボーっとした頭で、机の上の化学？の教科書を見つめる。

だけど、きれいに授業の記憶は頭の中になかった。

「ねえ、大丈夫？ 顔色悪いよ。今日一緒に帰ろうか？」

「…大丈夫だよ。それに杏子は部活があるじゃない」

「もう最後の試合も終わったし。ちょっとくらいサボっちゃっても良いって。ねえ、甘いのもでも食べに行かない？」

「…ありがと。…でも…今日は用事があるから真っ直ぐ帰る。また今度誘って？」

用事なんてないが、帰りに寄り道する気分でもなかった。

それに杏子にまで迷惑はかけられない。

私は手早く帰り支度をする。

鞆と教室の後ろのロッカーに入れていた荷物を大切に手に持つと、

杏子と連れだって教室を出た。

「ねえ、浩平君のこと後悔してるんじゃないの？」

何気ない様子で、杏子が尋ねる。

「ううん。…だって、浩平の気持ちに応えられない以上、遅かれ早かれ同じ結果になっていたんだと思う。いつまでも子供の頃みたい一緒にはいられない。仕方ないよ」

「…私は早希は浩平君のこと好きだと思っていたけど？」

「浩平に対する『好き』は恋人を想うような『好き』じゃないもの。幼なじみや家族に対するような『好き』だもの」

「どうして…『恋』じゃないと思うの？」

「だって、浩平と一緒にいるのは、一緒にいてドキドキと苦しいような感じじゃない。見つめられて頬が赤くなったりしない。寝ても覚めても、その人の事しか考えられないなんてこともない」

「ドキドキしないと『恋』じゃないの？」

「だって…」

そこで私はグッと詰まる。

今までドキドキと苦しい恋なんかしたことがない。

だけど、友達の話聞いても、恋愛小説なんかを読んでも、『恋』ってそういうもんじゃないの？

「『恋』なんて心次第でしょ？ 人が10人いれば、その心も十人十色。『恋』の在りようだって、10通りじゃないのかな？」

杏子の言葉に、先日朋姉が私にくれたアドバイスを思い出す。

“好きっていう気持ちなんて、あんまり難しく考えたらダメよ。すっごく嬉しいとき、悲しいとき、辛いとき、ピンチの時、ふとその人の笑顔が心いっぱい広がったり…って、そんなモノなんじゃないのかな。”

金曜日に公園で浩平の告白を断って。

土曜・日曜ともちろん会うことはなくて。

なのに、月曜・火曜と、無意識に浩平の姿を視界の中に捜している。

授業中も、いつしか視線は窓の外に向けられ、体育でグラウンドを駆ける集団の中に彼がいなかったか確認している。

自分でも、こんな状態になるとは考えていなかった。

今までどんなに浩平に依存していたか思い知る。

だけど、私の行動は間違ってたはずだ。

浩平は物心付いた頃から、ずっとそばにいたのだ。

その期間があまりに長かったから、彼がいなかった光景に、まだ身体が慣れないのだ。

慣れてしまえば、きっといつも通りの私に戻る。

うん。そうに違いない。

そのためにも、浩平の好意に頼っていた物はちゃんとケジメをつけよう。

私は右手に抱きかかえていたものに視線を落とす。

それは、橘桐人のスケッチブックだった。

浩平にこのスケッチブックを借り、枕元に置いて寝るようになって、変な夢を見ることなく、ぐっすり眠れるようになった。

だけど、これは浩平に返そうと思う。

浩平にあんな辛そうな顔をさせた。

私には彼の好意に甘える資格はない。

せめて自分の抱える辛さには、自分自身で向き合わなくては。

浩平を見かけたら、彼に返すつもりで、このスケッチブックを持ってきた。

その時——。

ちょうど廊下から階段の踊り場に差し掛かった時だった。

聞き慣れた声に、思わず鼓動が跳ね上がる。

思わず視線を向けた先、上方の中階段の踊り場に、ここ数日捜していた姿を見つける。

浩平が階段の上を見上げて、誰かに声をかけているところだった。

だけど、浩平と呼ぶ声は、次の瞬間喉の奥で止まってしまう。

浩平に続いて踊り場に姿を見せたのは、笑顔の神崎さんだったから。

私は咄嗟にクルリと体の向きを変え、浩平の視界に映らないように、早足で廊下を行き過ぎた。

そのまま立ち止まることなく、教室から一番遠い階段に向かう。遠回りになるけれど、浩平と神崎さんと顔を合わせ、言葉を交わす余裕はなかった。

「早希？ 大丈夫？」

杏子が後ろから声をかける。

浩平から声の届かない距離まで離れたことを確認して、私はそつと振り返った。

「…うん、大丈夫」

杏子は私の顔を見て、ホッとため息をつくと、小さく呟いた。

「…なんか今の早希って、突然居心地の良かった水槽から出されて、酸欠状態になってる金魚みたい…やっぱ今日は一緒に帰ろ？」

私は何も言えず、渡せなかった腕の中のスケッチブックをキュッと抱きしめた。

神崎さんの言葉に、軽く笑顔を見せている浩平の姿が、思いがけず凄くショックだった。

10、思いがけない優しさ

翌日。

『卒業生を送る会』当日は、朝から霏混じりの雨だった。

学園近くの市民会館を借り切って、普通科、美術科、音楽科の一年から三年までが一同に集う。卒業を間近に控えた三年に優先的に良い席が振り当てられるせいで、二年の私の席は一階の後ろの方だった。

選ばれた十組の演奏者のうち、神崎さんと浩平の演奏は3番目。

スポットライトを浴びている神崎さんは、長い黒髪に淡いピンクのミディ丈のドレスが華やかだった。だけど、私の目はその後ろで見慣れた制服姿でピアノを弾く浩平の一挙一動をずっと追いかける。耳は浩平の奏でるピアノの音だけを追いかける。

浩平のピアノの音に包まれる。

流れるように鍵盤を滑る浩平の両の手。遠目でははっきりとは見えないが、いつになく緊張しているであろう表情。

手に取るようにわかった。

浩平のことは誰より理解している自信があった。

なのに、なぜこんなに遠くなってしまうたんだろう。

あの時、浩平の気持ちを受け入れていれば、今私は誰より、彼の傍にいた資格があったのだろう。

でも、浩平は幼なじみの私ではなく、友人としての私でもなく、恋人としての私を望むなら、中途半端な気持ちでその手を取ることではできなかった。

浩平以外は全て音楽科の生徒だったが、浩平のピアノの腕は他の

演奏者に劣ることはなかった。むしろ伴奏にも関わらず、静かに心に余韻を残す秀でた演奏だった。

フォーマルな服装で演奏した者が多かった中で、逆に制服姿の浩平は人目を引いた。

一目で普通科の生徒と分かる赤地のネクタイ。

演奏が終わって、神崎さんが浩平をたてるように寄り添って、会釈をする。

会場のあちらこちらで「あの普通科の男の子、誰？」という囁きが聞かれた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「いやー、まいったね。浩平くん、『卒業生を送る会』で、一躍メジャーになって。どこで調べたのか、空手部にも彼目当てのギャラリイが来たりしてたんだよ」

卒業生を送る会から1週間ばかりたったある日。

下足室で靴を履き替えている私に、親友の杏子が声をかけた。

杏子はこれから空手部の部活に、浩平を送る必要のなくなった私は帰宅するところだった。

「そう……」

私は徐々に浩平のいない生活に慣れて来つつあった。

元々、浩平が私のせいで怪我をする前は別々に登校していたのだ

し、学年が違うのだから学校でも鉢合わせする危険もほとんどなかった。

今では、浩平が私に好きだと告白したのも夢の中の出来事だったかのような気がする。

だけど……。

「まあ、数日のことだったけどね。あれだけいつも同じ女の子が傍にいたら、彼女持ちだと思われるのも仕方ないけど……でも、実際どうなんだろう。浩平君、本当に付き合っているの？」

「…さあ？」

ふと下足室のガラス張りの扉の向こうに、見慣れた姿を見つけた。視線がそこに釘付けになり、動けなくなる。

浩平が神崎さんと何か話していた。

『卒業生を送る会』以降、浩平が神崎さんと一緒にいる姿は、たびたび目撃されている。

2人が付き合っているという噂があることは、私も知っていた。

だけど、あの告白の日から、私には浩平に話しかける機会がないのだ。

避けられているのかもしれないと思う。

浩平が私と神崎さんを天秤にかけていたとは思わない。

だけど、神崎さんが長い間浩平を思い続けていたことは、浩平も知っている。

浩平は優しい。

私が浩平の告白を断ったのをきっかけに、浩平が神崎さんの気持ちを拒むの止めたとしても不思議ではない。

噂を嘘だと言ってしまおうような自信は、私にはなかった。

歩き出そうとした浩平の腕を神崎さんが引き留める。

振り向く浩平に向かって、神崎さんが笑顔で何か言っている。

浩平の表情は見えないが、嫌がっている雰囲気もない。

浩平を引き留めている反対の手が、浩平の肩に伸びる。

心臓の辺りがヒヤリと痛んだ。

見たくないと俯いたとき、誰かにグツと左手を取られた。

「行こう」

顔を上げると、大沢桐人が無表情で私を見下ろしていた。

突然のことに、私は「え!？」と間拔けな声を発したまま、後の言葉が続けられない。

彼は杏子に「じゃあ、早希を借りるね」と告げると、私の手を掴んだまま足早に下足室を出、校門に向かった。

私は転げるように後をついていくのに必死で、後ろを振り返る余裕など無かった。

ましてや浩平がそんな私に気がついて、じっと私達を見ているなんて、気づくはずもなかった。

「この後、何か予定はあるの？」と問われる。

このまままっすぐ家に帰りたくはない。

浩平と神崎さんの親密な様子を思い出しながら、一人きりの家で、鬱々と過ごしたくはなかった。

「……別にないけど」と私が答えると、「じゃあ、僕に付き合って」と小さく微笑んだ。

校門を出たところで、大沢桐人は一旦私の左手を放すと、今度は左手を差し出して、私の右手を取った。

大沢桐人が車道側、私が歩道側を、さっきよりゆっくりした歩調で歩く。

そんな態度に、さりげない労りを感じて、少し気持ちが悪くなる。

ずっと大沢桐人と手を繋いでいることに、我ながらびっくりしていたが、振りほどく気にもならなかった。

ただ、前を歩く大沢桐人の足下を見つめながら、黙々と後を付いて歩いた。

そのまま、近くのバス停からバスに乗り、約15分。

一番後ろの席に2人で並んで座ったとき、ようやく大沢桐人が口を開いた。

「…あいつ、早希に何か言ってきた？」

ハッとして大沢桐人の顔を見ると、彼はじっと私の瞳を覗き込んでいた。

「ひょっとして、告白でもされた？」

何も言っていないのに、彼は私の表情を見て何か納得したようだった。

「で、早希は断ったわけだ」と言う大沢桐人の言葉に、小さな声で「…なんで…？」と呟く。

浩平に告られたことは杏子しか知らない。
杏子も誰かに話したりはしないだろう。

なのに、なぜ彼にはわかるのだろう。

自分で発したかどうかとも気づかないくらい小さな声だったが、それでも彼に届いたようだった。

「そりゃ、わかるさ。2人の…不自然な様子を見ていたら、何かあったんだろうなって事くらい」

と苦笑いをする。

「あいつが他の女と付き合うのが、そんなにショック？」

そう聞かれても、私は言葉を返すことができなかった。

浩平は私にとって、親友であり、弟だった。

なのに、彼女がいると考えただけで、こんなに切なくなるなんて、私っておかしいのかも。

浩平にあんな辛そうな顔をさせた私には、もう何の資格もないのに。

大沢桐人はそんな私の顔をじっと見つめて、それから急に真面目な顔になり、

「…そんな顔するなよ」と言って、頬にそっと手を伸ばした。

「そんな顔って？」

「…なんか、泣きそうな顔してる」

良心が咎めると大沢桐人は言った、

僕の思ったとおりに事が運んでいる訳なんだけど、と小さくため息をつく。

「早希がそんな顔すると、思った以上に堪えるな。…これは予想外だった」

＊ ＊ ＊

終点の駅前でバスを降り、連れだつて大通りを歩いた。人の波に流されていると、ぐっと手を引っ張られた。すぐ脇を自転車が通り過ぎる。

「ぼうつとしすぎ」

そう呟くと、大沢桐人は視線を合わさず、私の手を引いて歩き出す。

何気なく横を見ると、ショーウィンドウに映る大沢桐人に手を引かれた自分の姿。

ずっと浩平と神崎さんの睦まじい姿が、頭の中から離れない。なのに、今違う男の人と手を繋いで駅前通りを歩いている私。なんだかすごく不思議に思えた。

「あ、まずい」

突然。大沢桐人は小さく呻くと、私の手を引いて、ビルの間の細い路地に歩を進める。

左折するとき、チラリと大沢桐人が見ていた方角に目を向けると、いかにも不良っぽい感じで制服を着崩した男の子が三人、歩道の端でニヤニヤ笑いながら何か声高に話しているのが見えた。

「友達？」と聞く私に、「まさか」と応える。

「でも、まあ、ある意味似た者同士かもしれないな。僕もヤツらも居場所がないって点では。中学生の頃からつい最近まで、一緒に連んでた。結構やばいこともしたかも」

「そう……」

やばいこと？

そう言えば杏子が、大沢桐人には何かダークな噂がチラホラあるとか言ってたっけ。

何かわからないけど、今彼がそんな過去と縁を切りたいと思ってるなら良かった。

「……僕の両親って、金を十分に与えておけば、それでちゃんと親の責任を果たしているって錯覚しているような人達でね……僕は家にいても面白くなかったし、ヤツらは遊びたくても金がなかったし。で、ちようど需要と供給がピッタリ一致してしまったんだよね」

私は何と言葉を返したら良いのかわからず、呆然と大沢桐人の顔を見上げた。

彼も私の視線に気づいたようで、自嘲気味に少し笑うと、私の顔を覗き込む。

「もっとも今はそれもバカらしくなって、ヤツらとは縁を切りたいと思ってね、最近はずっと会ってない……だって、早希と一緒にいた方が楽しいからね」

最後の一文は、大沢桐人が私の耳元に囁くように顔を近づけたので、みるみる頬が熱くなった。

そんな私の反応を見て、彼がクスリと笑う。

一体どこまで本気で言っているのかわからない。

私にそっくりだという琴音さんも、橘桐人にこんな風にからかわれたりしたんだろうか。

こんな風に翻弄されたりしたんだろうかと、ふと思った。

大沢桐人に連れて行かれたのは裏通りに面した小さなカフェだった。

「画廊喫茶なんだ、ここ。結構僕のお気に入りのお店」

なるほど、壁にはたくさんさんの絵が掛けられている。

4人席が10席余りのこぢんまりとした店内には窓がない。

木の香りのするような屋内。柔らかな間接照明。

落ち着いた調度品。

静かに流れる一昔前のポップス。

「あゝっ！！ 絵のモデルの人だぁ！」

ぼーっと店内を眺めていると、甲高い女の子の声に我に返った。

髪をツインテールにした女の子が、セーラー服の上にベージュのカフェエプロンをして、ニコニコしながら、私の顔を覗き込んでいた。

大沢桐人が少し眉を顰めて、女の子に声をかける。

「おい。中坊がまたバイト？」

「バイトじゃない！ 家業の手伝いだよ。まあ、今月、ちょっとケ

ータイの請求が多くて親に叱られたから。……その分、自主的にこ
うやって働いて返してるんだけど、ね」

「じゃあ、ちゃんと仕事しろよ。いきなり『絵のモデルの人だ!』
じゃないだろ? 客には最初に何と言うんだよ」

女の子はウツと黙り込むと、姿勢を正して、「いらっしやいませ」
と私に頭を下げた。

そして、私と大沢桐人の前に水が入ったグラスを置き、メニュー
を差し出す。

「この子、この店のオーナーの娘なんだ。まあ、ガキだから、ちょ
っと失礼なところも多目に見てやって」

メニューを私に渡しながら、大沢桐人が苦笑いをする。

彼は、結構女の子の前ではクールなイメージがある。

なのに、いつもに比べて、すっごく態度が柔らかくない?

「ガキってなによ」とプンスカ怒っている女の子が可愛くて、思
わず笑みが漏れる。

2人はかなり昔からの知り合いって印象を受ける。

こんな素直で愛らしい子が相手だと、さすがにかなり捻くれてい
る彼も素直にならざるを得ないのかもしれない。

その時、大沢桐人の携帯が軽快なメロディーを奏でた。

取り出した携帯のディスプレイをチラリと見て、彼の眉間に軽い
皺が寄る。

「あ、早希悪いけど、ちょっと席外すよ。僕、ブレンド注文してお
いて」

大沢桐人の姿が見えなくなると、女の子は俄然生き生きと好奇心いっぱいという感じで話しかけてきた。

「桐ちゃんきりの彼女さんですか？ 初めまして。私、鈴原千佳すずはら ちかです」

「…は？」

彼女さん？

いや、それは間違いだから。ちゃんと訂正しておかなきゃ。

「私、川瀬早希です。桐人くんとは同じ学校だけど、彼女じゃないよ」

「え？ そうなんですか？ でも、桐ちゃんの絵の人物ってあなたですよ？」

きょんとした不思議そうな顔で私を見ている。

「それは…そうなんだけど…」

「桐ちゃん、最近土・日も家で描いてるんです。この前の土曜日にここに寄ったとき、キャンバス持っていたから、無理矢理見せてもらったんです。早希さんを見て、一目でわかりました」

にっこり笑う顔が可愛いなあって思う。

桐人君が中坊って言ってたから、中学生だよな。

「珍しく人物画だったからびっくりしたけど…、私、すごく嬉しくて。桐ちゃん、才能あるのに、…このところずっと絵は描いてなく

て、なんだかフラフラばかりかしてたから……あたし、すごく心配してたんです。でも、この頃、桐ちゃん、変わってきて……きつと早希さんのお陰ですね」

「……いや、それは違うと思うけど」

即座に否定する。
なのに。

「桐ちゃん、友達をここに連れてきたの、早希さんが初めてなんですよ。……これからも…桐ちゃんをよろしくお願いします、ね？」

千佳ちゃんがペコリと頭を下げるものだから、つられて私もペコリと挨拶する。

頭を下げてから、「いや、この反応はおかしいよね」とハツとする。

でも、千佳ちゃんはニコニコするばかりで。

素直で全然邪気がないから、私も思わず笑みを返してしまう。

「あ、そう言えば、ここのギャラリー、桐ちゃんの絵もあるんですよ？」

彼女が指さした絵。

それは真っ赤に染まった町並みだった。

建物の朱と真っ黒な影。大胆な構図。力強いタッチ。

席を立って、絵に近づいてじっくり見てみる。

何気なく彼はもっと優しい色合いの絵を描くと思い込んでいた。

橘桐人の絵が繊細で、優しい印象だったから。

だから、凄く驚いた。

「ね、上手でしょう？ 桐ちゃんが中3の時、描いた作品なんですよ。うち、画廊喫茶なんてやってるから、私のお父さん、絵を見る目はあるんだけど、とても中学生の絵に見えないってべた褒めだったんです」

後ろから千佳ちゃんの嬉しそうな声がした。

確かに中学生の絵には見えない。「そうだね、上手だね」と頷いて振り返る。

その時、携帯を片手に、こちらに戻ってくる大沢桐人が目に入っ
た。

ちよつとムスツとした顔をしている。

千佳ちゃんもその様子に気づいたようで、慌てて元の席に戻る。

「……で、ご注文は？」と小さな声で、私に尋ねる。

だけど、大沢桐人は耳ざとく、早希ちゃんの声聞きつけたよう
だ。

「……って、千佳、まさかまだ注文取ってないわけ？ 職務怠慢でオ
ーナーに言いつけるぞ」

「ご、ごめんなさいっ！…」

「どうせ、早希にいらぬこと吹き込んでたんだろう？」

「いらぬことなんて言っていないよう。桐ちゃんのこと、褒めてた
んだもん——」

大沢桐人の突っ込みに、おたおたする千佳ちゃんが微笑ましくて、クスリと笑ってしまう。

彼が本気で怒っていると信じて必死で宥めようと頑張っている様子に、悪いと思いつながら口元が緩むのを止められない。

そんな私をチラリと見て、彼がちょっと柔らかい表情をする。

「まあ、許してやるか。……千佳の特技に免じて」

「…私の特技？」

不思議そうな顔をする千佳ちゃんに、ちょっと意地悪な顔で彼が答える。

「そう。本人はごく真面目にやってるつもりなのに、なぜか周りを笑いの渦に巻き込んでしまうというおまえの特技」

「……………なによ……、それっ!!!」

真っ赤になって怒っている千佳ちゃんが可愛くて。

大沢桐人と一緒にプツと吹きだしてしまった。

ちゃんと笑えていることに、改めてホッとしている自分がいる。

大沢桐人が「やっと笑った」と、照れたように呟く。

「じゃ、千佳、ちゃんとオーダーとって。俺はブレンド。で、早希は？」

ちよつと考えて、早希ちゃんにメニューを返ししながら、注文する。

「……私はミルクティーで……」

本当はクリームソーダが好きなんだけど、子供みたいだし。

大沢桐人の前では、恥ずかしい。

そう言えば、女友達と一緒にの時も、ちょっと見栄を張ってコーヒ
ーとかミルクティーとかを注文することが多いかも。

——浩平の前だったら、全然平気なんだけど。

そう思って、はっとした。

結局、何かにつけて思い出すのは浩平のことだ……。

今更ながら気付いた事実には、私は小さく溜息をついた。

11、新しい居場所

それから、大沢桐人は週に2度、3度と、学校帰りに千佳ちゃんの店に誘うようになった。

断る理由もなく、むしろ放課後浩平と神崎さんが一緒にいる姿を見たくなくて、むしろ私は喜んで大沢桐人の誘いに応じた。

身を切るような寒さの屋外から暖かい店内に入るとホッとする。

優しい照明に、静かに流れる一昔前のポップス。

駅に近くても、大通りから外れているせいか、いつ行っても混み合っているというのではなく、落ち着いた印象の店内。

効果的に白い壁に飾られた絵画は買い手が付いたり、画家が他の作品と入れ替えたりで、時々新しい作品と入れ替わっているように、じつくり眺めていると知らない間に時間が流れた。

大沢桐人の絵を始め数点の作品は非売品のようで、ずっと指定席をキープしているようだった。

まるで隠れ家のような居心地の良い空間。

そして、千佳ちゃんの人懐っこい笑顔。

千佳ちゃんは中学1年生で、私とは4つの年の差があったけど、素直で明るい千佳ちゃんと私はすぐに仲良くなった。

一人っ子の私に、同じく一人っ子の千佳ちゃん。

私は妹が出来たような気持ちだったし、千佳ちゃんも私を姉のよう慕ってくれるのが嬉しかった。

千佳ちゃんに請われて携帯のメアドも教えあった

お店に行かない日は千佳ちゃんからメールが来る。返事をするのも楽しかった。

大沢桐人は月・水・金曜のクラブ活動（美術部）に真面目に出ているようなので、帰宅部の私は何度か一人で店に行ったりもした。

千佳ちゃんは大沢桐人がいてもいなくても、気軽に話しかけてくれる。

千佳ちゃんは父子家庭の一人っ子。

幼い頃にお母さんがなくなってすぐ、千佳ちゃんのお父さんは学校から帰ってきた娘が寂しい思いをしないよう脱サラして、今の画廊カフェを始めたらしい。

カウンター越しに見るマスター（千佳ちゃんのお父さん）は身体は大きいが、カフェ・エプロンが似合って、いつもニコニコしていて、とても穏やかな雰囲気の人。

千佳ちゃんのお母さんが亡くなるまでは有名商社の第一線の営業マンだったそうだけど、ホントかなあなどと思ってしまいうくらい。

千佳ちゃんの中学校はカフェから近いらしく、千佳ちゃんは放課後のクラブ活動が終わると、まっすぐ店に帰ってくる。そして、用事がない限り、お父さんの手伝いをする人が多いようだ。

お店が空いているときは、本を読んだり、宿題をしていた私の前の席にちよこりと座り、一緒にたわいないおしゃべりをした。

二人で色々話しているうちに、クラブ活動を終えた大沢桐人が合流するということも何度かあった。

はきはきして可愛い千佳ちゃんは、すっかり看板娘、常連客のアイドルだ。

マスターが千佳ちゃんを見る目はとても優しく、すぐく娘を大事に思っているのがわかる。

お母さんがいなくても、その分お父さんが十分な愛情を注ぐと、子供は素直な優しい子に育つて実例みたい。千佳ちゃんって。

そんな無邪気で裏表のない千佳ちゃんだから、鈍感な私でもすぐに気が付いた。

千佳ちゃんの想いがどこにあるか。

＊ ＊ ＊

その日。

大沢桐人と千佳ちゃんの店に行くと、珍しくマスターがオーダーを取りに来た。

「あれ？　いつもの元氣娘はどうしたの、マスター？」と大沢桐人が尋ねると、マスターはクスリと笑って、カウンターの隅を指さした。

千佳ちゃんがカウンターテーブルにノートや教科書を出して、うんうんと唸っていた。

「ひょっとして勉強してんの？　へえ、珍しい」

「明日から学年末考査らしくってね。土壇場まで追いつめられてるみたいだね」

マスターがオーダーを取ってカウンターの奥に引っ込むと、大沢桐人は「ちよっとごめん」と断って、カウンターに座る千佳ちゃんの後ろに回り、手元をのぞき込んだ。

「……………このXの値、マイナスが抜けてる」

「えっ！？…………あ、ホントだ…」

指差された箇所を見て、千佳ちゃんが慌てて消しゴムで消し、正しい答えを書き込んでいる。

「ほら、ここも」

「え、ごめんなさい…」

それから、千佳ちゃんはハツとしたように振り返って「桐ちゃん！？」と素っ頓狂な声を出した。

「で、どこで煮詰まってる訳？」

「や…ここからどうやって解いていけば良いのかわからなくなっちゃって……」

「このXに、こちらの答えを代入すれば良いんだろ？」

「?…なんで？」

「おい、テスト明日からなんだろ？　なんか基本的なところで既に躓いてるようだけど？」

呆れたように言うと、大沢桐人は千佳ちゃんの隣のスツールに座り、問題を覗き込んだ。

突然近くなった距離に、千佳ちゃんは頬を染めて顔を仰け反らすと、チラリと私の顔を見て焦ったように声を上げた。

「いいって、桐ちゃん！　彼女、放っておいたらダメだって！　私、一人でできる。大丈夫だから！」

真っ赤になってオタオタ慌てている千佳ちゃん。

かわいいなあ。

私が一人でこの店に来ている時も、千佳ちゃんは色々話しかけてくる。

人懐っこい子だなあと思っていたけど、特に大沢桐人の話を嬉しそうに一生懸命聞いている様子を見たら、いくら疎い私でも分かっていた。

千佳ちゃんは大沢桐人が好きなんだって。

なのに千佳ちゃんはそんな気持ちを隠して、初対面で「桐ちゃんをよろしくお願いします、ね?」と言ったように、本気で私と大沢桐人の仲を取り持とうと考えているようだった。

大沢桐人が案外和菓子とか甘いものが好きであること。

セロリと納豆が苦手なこと。

音楽はジャンルを問わず、流行のポップスでも、クラシックでも何でもOKなこと。

ご両親は留守がちで、通いのお手伝いさんが桐人兄弟の世話をしていること。

お兄さんは都内の医科大生で、桐人とは仲が悪いこと。

最近絵を描くようになってからは、千佳ちゃんの店にも再びよく来てくれるようになったこと。

そして、近頃では随分表情も明るく柔らかくなったこと。

——全て千佳ちゃんが教えてくれた大沢桐人情報だ。

別に付き合ってるわけではないって、千佳ちゃんには何度も言うてる。

だけど、「きっと桐ちゃんは早希さんが大好きなんだと思う。早希さんも桐ちゃんのこと、好きになってあげて」なんて、健気な表情で言われると何も言えなくなってしまう。

独りぼっちで帰宅しても、自分ではどうしようもないことをグルグル考えるだけだったろう。

少なくとも、大沢桐人は私に放課後の居場所を与えてくれた。

そして、私が本当に琴音さんの生まれ変わりだったら。

大沢桐人が橘桐人の生まれ変わりだったら。

きっと二人がいることは、すぐく自然で幸せなことなんだろう。たとえ、今はそれほど強い気持ちを持っている訳でなかったとしても。

宗師さんの話では、橘桐人が琴音さんに一目惚れして、いつしかその強い想いに応えるように琴音さんも橘桐人を愛するようになったという事だった。

だったら、こうして時を重ねていけば、私もいつか大沢桐人が本当に好きになるのかもしれない。

私たちの高校も来週から学年末テストが始まる。

大沢桐人が千佳ちゃん勉強を見ている間、私も少し勉強をしておこう。

私は二人より少し離れたテーブル席に座ると、隣の椅子に持っていたスケッチブックと鞆を置き、リーダーの教科書を取り出した。スケッチブックは言わずとした橘桐人のスケッチブックだ。

浩平に返さなければと持ち歩いているが、もう返すことは半分諦めた。

たぶんお互いに避けているのだと思う。

たまに遠く姿を見かけるが、言葉を交わすこともない。

大沢桐人を心から好きになれば、大沢桐人しか見えなくなれたら、きっと心も軽くなる。

浩平と神崎さんが二人でいるのを見ても、笑っていられるようになるのだと思った。

そうしたら、このスケッチブックも必要ではなくなるのだろう。

日本史のノートを眺めていたら、テーブルの上に注文したミルクティーがコトリと置かれた。

「すまないね」

顔を上げると、マスターが申し訳なさそうな表情をしていた。

ふと大沢桐人を見ると、彼は千佳ちゃんの手元を覗き込みながら、何やら話しかけている。

シャープペンシルのお尻の部分で、千佳ちゃんの頭を叩いたりしているが、その表情は穏やかで優しい。

まるで日頃の彼とは別人のようだ。

千佳ちゃんって癒し系だもんね。

あの大沢桐人も千佳ちゃんの前だと構えたところがなくなって、リラックスしてしまうんだろうなあ。

さすが千佳ちゃん。

概して学校での大沢桐人は、誰に対しても冷たく、人を見下しているかのような印象を受ける。

その中で、自分に対する彼の態度は、俺様には違いないが、特別な「柔らかさ」や「親切」を感じることが時々あった。

絵のモデルを頼まれ、自分に絡む大沢桐人の態度を見て、彼にとって、自分の存在が特別なのだと漠然と思いこんでいた。

だけど、あんなも穏やかで優しい笑顔を向けられた事ってあったっけ？

よく考えれば、別に私は大沢桐人から「好き」という言葉をもらった訳でもなかったと、ふと思った。

そんなことを冷静に考えている自分が、なんだか不思議だけど。

「いいえ。うちの高校も来週からテストだから、テスト勉強が出来て、ちょうど良いです」

マスターには不自然にならないよう、にこりと笑って、そう答えた。

30分後。大沢桐人は千佳ちゃんにいくつか千佳ちゃんに課題を出して、私の向かいの席に腰を下ろした。

「試験勉強？」という問いに「まあね」と答える。

「ふくん、やっぱり普通科と美術科じゃ、試験範囲も違うみたいだね」

私のノートを覗き込む大沢桐人に、ふと思いついて言葉をかけた。

「そう言えば、千佳ちゃんといるときの桐人くんって、雰囲気が変わるね」

「そう？」

「うん。何かトゲトゲしているところがなくて、穏やかで丸い感じ」

「何、それ？」

「良い感じって…一応褒めているんだけど」

大沢桐人は一瞬キュツと眉間に皺を寄せたが、やがてニヤリと笑うと私の顔を覗き込んだ。

「早希、ひょっとして妬いてるの？」

「別にそう言う訳じゃないよ」

「ふーん。……それは残念」

それから大沢桐人は私のノートを取り上げ、ぱらぱらページを捲りながら、ボソリと呟いた。

「……あいつは僕にとって、妹みたいなもんだから。それ以上でもそれ以下でもない」

「でも……」

「…去年の今頃は千佳のヤツ、ランドセル背負っていたんだよ。信じられるか？ そんな子供相手に特別な感情を持つなんてあり得ないから」

「そ、そんな言い方って…！」

大沢桐人の声が大きい事にドキリとして、咄嗟に千佳ちゃんに視線を向けた。

案の定、千佳ちゃんはこちらを見ていて、一瞬クシュツと顔を歪ませた。

くるりと背を向けると、テーブルの勉強道具を手に店舗の奥にある「Staff Only」と書かれた扉の向こうに姿を消した。

扉の向こう側は住居スペースになっているらしい。

千佳ちゃん、傷ついた顔をしていた。

私は大沢桐人の無神経さにカッとして、声を荒げた。

「桐人くん！千佳ちゃんに聞こえたみたいだよ！……泣きそうな顔をして行っちゃったよ」

「いいんだ。わざとあいつに聞こえるように言ったんだから」

「どうして、そんなこと！」

「あいつは……傷つけたくないんだ。だったら、最初からいらぬ期待は持たさない方が良い」

大沢桐人は気が付いていたんだ。千佳ちゃんの気持ちに。

彼はいつものポーカーフェイスに戻っている。

何を考えているか推測できない無表情な顔。

学校で見かける彼がいつも浮かべている表情。

そして、先ほど千佳ちゃんに勉強を教えていた時と、正反対の表情。

私はそれ以上は何も言わなかった。

千佳ちゃんはおかしいそうだと思ったけれど、その時の私はまだ、

大沢桐人は橘桐人の生まれ変わりかもしれない、——即ち私の運命の人なのかもしれないなんて信じていたから……。

少なくとも浩平を傷つけて居場所の無くなった私に、彼は居場所を与えてくれたのだ。

12、迫りくる影

『今日暇ですか？ 今からお店に来れますか？』

やっと学年末テストが終わった週の日曜日。

朋姉にも会いたかったが、実弟である浩平と顔を合わせたくなかったし、親友の杏子は家族で出かけており、特に予定のない私は暇をもてあましていた。

何をするでもなく、ゴロゴロとベッドに寝転がって漫画を読んでいた私の元へ、千佳ちゃんからメールが来た。

大沢桐人と気まずい事があったあの後も、千佳ちゃんからは何事もなかったようにメールが来て、お店を訪れた私に、彼女は屈託なく話しかけてきた。

私も今まで通り、変わらず千佳ちゃんと接していた。

『どうしたの？』

『絵が出来上がったって。今、桐ちゃんがお店に持ってきているの』

絵が出来上がった――。

それは、私がモデルを務めたあの絵に違いない。

橘桐人のスケッチブックに描かれた人物像が脳裏に浮かんた。

夢の中のそれらの絵は、いつも柔らかで懐かしい色彩を伴う。

まるで実際に目にすることがあるかのように、筆のタッチもその色彩も陰影も、鮮やかに浮かび上がるのだ。

あの優しさにまた触れることができるのかと思ったら、いてもたってもいられなくなった。

『すぐ行くね』と返信し、私は長い間会えなかった恋人に会うような心持ちで出かけた。

———だけど。

開店して、それほど時間がたっていない店内は、それでも少し遅い朝食をマスター自慢のモーニング・セットで、という常連のお客で大半の席が埋められていた。

入れたてのコーヒーの深い良い香りが店内に漂っている。

ギャラリーになっている壁の隅で、マスターと馴染みのお客さんと千佳ちゃんと大沢桐人が笑いながら話をしていた。

みんなの視線を集めている一角。イーゼルに載せてその絵はあった。

『琴音 おまえをあきめない』と言葉を添えられていた、橘桐人のスケッチブックのページに描かれていた少女。

眩しそうな表情を浮かべ、宙に手を差し伸べていた私に良く似た少女を思い出す。

目の前の絵の少女も宙に手を差し伸べていた。

銀に霞む背景。滲む町の景色。

複雑な色彩の鈍色の空から舞い落ちる雪。

それを受け止める少女の掌。

まるで景色に同化するかのように儂い雰囲気を漂わせ。

構図は似ていた。

双方とも素人が見ても、非凡なものを感じさせるスキルを持った

絵柄。

だからこそ、よく分かる。

橘桐人の肖像画は、淡い優しい色合いが特徴で、どこまでも写実的で緻密で、繊細なタッチを重ねたものだった。

生き生きとした少女のはにかんだ微笑が、見る者を溢れるような優しさで包み込む。

でも、目の前の大沢桐人の作品は抽象的な要素を多く含み、大胆で潔い筆遣いだった。

中央に配された少女は誰も寄せ付けない雰囲気を漂わせている。幻想的で非現実的な画風。

例えて言えば、双方の画風は明と暗。柔と硬。現実と幻想。

同じ魂が描いたなんてありえない。

大沢桐人は橘桐人の生まれ変わりなんかじゃないと、突然悟った。私はその事実打ちのめされた。

「あっ、早希さん。いらっしゃ…」

私に気が付いてニコニコと駆け寄ってきた千佳ちゃんに笑顔を向けることは出来なかった。

千佳ちゃんや周りの人たちも、私の様子が変わったようだったが、そんなことに気を回す余裕もなかった。

怪訝な表情を浮かべた大沢桐人に視線を向けると、

「これは…桐人さんの絵じゃない…」

と、私は小さく呟く。

私は――――。

こんなにも、橘桐人の絵に捕らわれていたんだ。

あのスケッチブックを偶然開いてしまった日から。

心の奥底の不確かな記憶でしか知らない彼の魂に、夢の中で「おまえをあきらめない」と囁いた人に。

非現実的なことだとわかりながら、出会えることを疑ってなかった。

あの人がいつか必ず自分を捕まえてくれると。

「早希？」

と、驚いた表情で問い返す大沢桐人の顔が、ユラリと歪む。

橘桐人を彼に重ね合わせたのは、私が勝手に早合点しただけのこと。

大沢桐人には何も落ち度はない。

「……ごめんね」

それだけ言い捨てると、私は踵を返し、通りに飛び出した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

人混みを縫うようにすり抜け、ただ必死で駆けていた。

頭の中はただ混乱して、取り留めのないことが渦巻いていた。

だけど、確か宗師さんは言っていた。

橘桐人は絵を描く以外不器用な人だったけど、優しくて誠実な人だったと。

それは大沢桐人の人物像とは合致しない。

大沢桐人は万事そつのない、不器用さとは無縁の人だ。

同じ名前で、同じように絵を志していて、同じようにモデルを請われて。

一致する点だけに飛びついて、一致しない点には目をつぶって、私は大沢桐人が夢の人だと思ひ込もうとしていたのかもしれない。

そうして、きっと彼を傷つけた。

浩平を傷つけてしまったように。

「早希さん!!」

突然右腕を捕まれ、引き留められた。

息を切らした千佳ちゃんが、泣きそうな顔をして私を見つめていた。

「早希さん。酷いよ! どうして桐ちゃんに…あんなこと、言うの?」

「え?」

「あれは桐ちゃんの絵じゃないなんて……どうしてあんなこと、言ったの? 桐ちゃんは本当に一生懸命描いていたんだよ!」

「ち…違う。あれはそんな意味じゃなくって」

橘桐人の絵じゃないという意味で、こぼれ落ちてしまった言葉だった。

だけど、千佳ちゃんにそれをどう説明したらいいんだろう。通りを行く人々が、チラチラ私たちに視線を向けながら、通り過ぎる。

通りの真ん中で、なに喧嘩してるんだって思われてるんだろう。明らかに通行の邪魔になってるし。

「千佳ちゃん、あっちで…もっと静かなところで話そ？」

私の提案に千佳ちゃんは素直に付いてきた。

私たちは本通りから人通りの少ない脇道にどんどん入っていく。

「いつも早希さんが持つてる桐ちゃんのスケッチブック。前に早希ちゃんが席を外したときにこっそり見たことがあるの…。どのページも早希さんでいっぱい…。どのページも桐ちゃんの気持ちが溢れていて……。ねえ、早希さん。桐ちゃんの気持ちを傷つけたりしないで。お願いだから……」

「あ、あのスケッチブックは桐人くんのじゃなくて……」

「ちゃんと表紙に『桐人』って名前が書いてあったもん」

千佳ちゃんは完全に勘違いをしているようだった。

でも、どうやって誤解を解いたら良いんだろう。

どんな言葉を連ねたら、夢物語のような橘桐人のことを理解してもらえるんだろう。

千佳ちゃんに思い違いをされたまま、別れたくない。

だけど、適切な言葉が何一つ思い浮かばなかった。

「ねえ、早希さん。桐ちゃん一時すごく荒れていたのに、やっと落ち着いてきたの。笑ってくれるようになったの。きっと早希さんのおかげだよ。……だから、私、早希さんだったら良いって。桐ちゃんの彼女さんになってくれたらなあって。ホントに……」

その時。

背後から、聞き覚えのない若い男の声が、一生懸命話している千佳ちゃんの言葉を遮った。

「桐ちゃんって大沢桐人のことだよな？ おまえ、ヤツが時々行ってた画廊喫茶のガキだろ？」

「ふーん…で、あんたがヤツの彼女って訳？」

人を小馬鹿にしたような、悪意のある声にゾツとして振り返る。以前見かけたことがあった不良っぽい男の子が三人、ニヤニヤ笑いながら道を塞ぐように立っていた。

そして、お互いに目配せをすると、舐めるようにジロジロ眺めた。私のことを見下すような、横柄な態度で。

「ちょうど良かった。桐人のヤツ、散々俺らの世話になっていながら、最近メールも無視しやがってさ。俺ら、頭にきているんだよね。あんた、あいつの彼女なら、ちよつと責任とってもらおうかな――」

13、絶体絶命（前書き）

この作品には、お話の進行上、乱闘シーンが含まれます。
苦手な方はスルーして、「次の話」にお進み下さい。（スルーして
いただいても、お話は繋がるようになっていきます）

13、絶体絶命

「早希さんは関係ない！ 桐ちゃんは今、真面目に頑張ってるんだから、もう桐ちゃんに関わらないで！！」

千佳ちゃんが食ってかかるけど、男達はヘラヘラと下卑た笑いを浮かべ、私たちを見下したような様子で、お互いに言葉を交わしている。

「何、このガキ？」

「ほら、桐人がよく入り浸ってる喫茶店のガキだろ？」

「俺ら、お子ちゃまには興味ないの。俺らが用事があるのは、そっちのお姉さんだけだから、ガキは引っ込んでな！」

男の一人がまっすぐ私を指差す。

冬だというのに、一気に冷たい汗が噴き出し、ゾクリと身体が震えた。

「あっちに行って！ 大きな声を出すよ！」

怯まず、相手を睨みつけるようにして、千佳ちゃんが気丈にも言い捨てる。

情けないことに、私はといえば、降って湧いた恐怖に足がガクガク震え、声など出ない状態だ。

丁度路地を、スーツを着たサラリーマンが通りかかり、私たちが絡まれている様子を見ると、一瞬足を止めた。

助けを求めようとした、私の様子には気がついたと思う。

だが、男の一人が睨みをきかせると、そのサラリーマンはサッと

視線を逸らせ、そそくさと通り過ぎていった。

「残念。助けは来ないようだな」

男達の下卑た笑いが重なる。

一人の腕が私に伸びる。

その時————。

「早希さん！ 逃げて!!」

千佳ちゃんが、私を捕らえようとした三人の中で一番大きな男の腕をムズと掴むと、目にもとまらぬ早業で、その懷に潜り込んだ。

男が、クルリと宙に浮き、地面に叩きつけられる。

「ゲッ……」と呻いて、頭かどこか打ったのか、その男は地面に伸びたまま、すぐには起きあがれないようだった。

私も他の二人の男も目の前に繰り広げられた光景に呆然と目を見開いた。

千佳ちゃんが、———中学1年生：幼い風体の、可愛いらしく大人しそうな女の子が、30cmは身長が違う大柄な男を、鮮やかに投げ飛ばしたのだ。

これって：確か柔道の背負い投げとかいう技だっけ。

「こ、こいつ。ふざけたことしやがって！」

我に返って、掴みかかろうとした金髪ピアス男の腕をパシッと払って、千佳ちゃんはそのまま捻りあげた。

男が呻き声をあげる。

すごいよ、千佳ちゃん。

「早希さんに何かあったら、桐ちゃんが悲しむ。早く行って——」
「でも…でも、千佳ちゃん置いていけないよっ」

そのまま視線を私に向けたその隙をつかれて、千佳ちゃんの頬に
三人目の——オレンジ色の短髪男の拳が飛んだ。
全く女の子に対する遠慮などない一撃だった。

体重の軽い千佳ちゃんの身体は跳ぶように、壁に打ち付けられた。

「ぐっ」と息を詰めたような声が、千佳ちゃんの唇から漏れた。

「千佳ちゃん!!」
「手間取らせるなよ!」

私の前に再び金髪ピアスの手が伸びてくる。
反射的に飛び退く私と男との間に再び飛び込んできた小さな影が、
その手を阻んだ。

千佳ちゃんが男の腰にしがみついている。
引きはがそうとする男の力に、渾身の力を振り絞って対抗する。

「さ…きさん! 早く…にげ…て! 早く——!!」

千佳ちゃんの叫び声でスイッチが入ったように、私は男達と反対
方向に全速力で駆け出していた。

ごめんね。千佳ちゃん……。

心の中で、千佳ちゃんに謝る。
滲む風景に、泣きそうになっている自分に気づくが、グッと歯を
食いしばって涙を堪える。

男達の元に彼女だけを残してしまった事が心配でたまらない。

だけど、自分があの場合に残っていたとしても、千佳の足手まといにしなければならないだろう。

男達の狙いは私にある。

それは千佳ちゃんの会話から、男達が勝手に私を大沢桐人の彼女だと誤解したことが原因なのだが。

しかし、男達の雰囲気は誤解だと言ったところで、それを受け入れる程甘い雰囲気はない。

それどころか、捕まってしまうえば、どんな目に遭うか……きっと無事では済まないだろう。

裏通りをとにかく相手の目から逃れるため、めちやくちに駆けた。

いくつ目かの角を曲がったとき、目の前の道は途切れ、金網の向こうに線路が見えた。

完全な袋小路だった。

どうしよう……。

後ろから足音が追いかけてくる。

道に戻る余裕はない。

私はとっさに目の前にあるマンションのエントランスに駆け込んだ。

エレベーターは使わず、階段を駆け上がる。

2階にたどり着いた時、下から追いかけてくる複数の足音が聞こえた。

追いつかれないよう、必死で駆け上がる。

3階…4階…5階……屋上。

ガチャガチャとドアの持ち手を回すと、運良く扉が開いた。

勢い良く吹き込む風に逆らって、重い鉄製の扉を押し開けると、

隙間に身体を滑り込みました。

すぐに閉めようとしたが、その扉の間に足が差し込まれる。

「いや…っ、…こっちに来ないで！」

扉がそれ以上開かないようにグッと力を込めて押しつけるが、力の差は歴然だった。

徐々に押しやられる扉。

その隙間から、金髪ピアス男の笑っている顔が見えたとき、絶望感に身体力が抜けた。

少しでも距離を置くために、背を向け、手すりに駆け寄る。扉を押し開け現れたのは、金髪ピアス男とオレンジ短髪男の二人だった。

一瞬、もう一人の男と千佳ちゃんの事が頭をかすめたが、今は心配する余裕もなかった。

5階建てのマンションの屋上から地上を見下ろす。

私の首下くらいの高さの手すりは乗り越えられても、この高さから飛び降りたら、命はないかもしれない。

だけど、このまま男達に捕まってしまうのはもっと怖い。

躊躇しているうちに、グッと左腕を捕まれ、引っ張られた。

「鬼ごっこもこれで終わりだぜ」

金髪耳ピアスの声に、ぞっと冷たいものが、背中を駆け抜けた。同時に、カシヤリと機械音がする。

「へへっ、良い表情。『彼女、恐怖におののくの図』って感じ？」

オレンジ短髪男が、携帯を操作しながらニヤリと笑った。

「今の画像、桐人の携帯に送ってやるよ。さて、何枚目の写メでヤツはやってくるか、賭けてみる？」

「おう、そりゃ面白いわ。俺はヤツが来ない方に賭ける」

「ええ？ 俺も来ない方に賭けようと思ったのに。そんじゃ賭けにならないじゃん」

男は互いに余裕の表情で笑いを交わす。

そして追い詰めた獲物が怯えるのが楽しくて堪らないといった様子で、呆然とする私に視線を向けた。

「…別にあんたに恨みがある訳じゃないけど、…あんな薄情なヤツの彼女なんかになってしまったのが不運だったよな」

「そうそう。ヤツには自分の薄情さをとことん悔やんでもらわないとな」

捕まれた手を振りほどこうとしたが、びくともしない。

「私は別に桐人くんの彼女なんかじゃないない！」

右肩にかけていた大きめのトートバッグを手に持ち、振り回す。

左手を振りほどくことはできたが、バッグはすぐに奪われてしまった。

バッグの中身が屋上のコンクリートの床に散乱する。

ハンカチ、財布、携帯、定期入れ……。

だが、金髪耳ピアスはそんなものには興味を示さず、『桐人』と名前が書いてある橘桐人のスケッチブックを手を取った。

「ふーん。……どのページもあんたの絵で一杯じゃん。俺らはい

つに思い知らせてやればそれで良いんだよ。あんたがヤツをどう思おうと関係ないの。：へへ、でも思った以上にあいつにダメージ、与えられそうじゃん」

金髪ピアス男はそのままスケッチブックの何枚かのケント紙に手をかけた。

そしてそのまま、止める間もなく、何枚かのスケッチを力任せに破り捨てた。

琴音のはにかんだ笑顔が裂けて風に舞う。

「やめて———！」

自分の一部が引き裂かれた気がした。
再び携帯で画像を撮る機械音がする。

「2枚目……『彼女、泣き崩れる図』って感じ？」

オレンジ短髪男が楽しそうに携帯を操作している。

私はそんな光景ももはや目に入らず、冷たい床に跪くと、スケッチの断片に震える指を伸ばした。

『好きっていう気持ちなんて、あんまり難しく考えたらダメよ。すっごく嬉しいとき、悲しいとき、辛いとき、ピンチの時、ふとその人の笑顔が心いっぱい広がったり……って、そんなモノなんじゃないのかな。きつと早希ちゃんの心の中に答えはちゃんとあるんだよ。何かのきっかけで気づくモノだから……』

あの日の姉妹の言葉が脳裏に蘇る。
やっと分かった。

今、この絶体絶命の時に。瞼に浮かぶのはただ一人の人。

それは両親でもなく、友人でもなく、ましてや大沢桐人でもなかった。

男が腕を掴んで、私を無理矢理に立たせる。

男の手が私の胸ぐらを掴もうとするのを感じて、ぎゅっと目を瞑る。

なんてバカなんだろう。

ここまで追い詰められないと自分の気持ちが分からなかったなんて。

分からないだけでなく、私の無神経さが彼を深く傷つけた。もう全てが遅すぎる。

「さて、3枚目。今度はどんな構図を送ろうか——」

嫌だ。——怖い。

その言葉に私は身体を硬くして、泣きながら、ただ一人の人の名を呼んだ。

「や、助けて。浩平、浩平——っ、こうへ……」

一度口から零れてしまった名前は止まらず、狂ったように何度も繰り返す。

ピアノのあるリビングで曲を弾き終えた浩平が私に向けるはにかんだような笑顔が浮かぶ。

あまりにずっと近くにすぎで、その笑顔を向けられる事がどんなに嬉しいか、幸せか見過ぎてしまっていた。

本当は、物心ついた時からずっと好きだったのに。

だけど、今までの関係でも十分満足していた私は、その居心地の良い場所を失いたくなかった。

その関係を変えるのが怖かった。

だから、ずっとその気持ちに気づこうとしなかったのだ。

「うるさい！」

男の苛立った声に更に身を竦めた瞬間、パシッと音がして、急に男に捕まれていた腕が自由になる。

恐る恐る開いた目の前には、黒いダウンジャケットを着た大きな背中。

このジャケットには見覚えがあった。

「…こ…こ…こう…へい？」

金髪ピアス男は床に転がり、びっくりした顔で突然現れた男の子を見上げている。

「おまえら、絶対許さない！」

いつもよりかなり低音だったが、それは確かに聞き慣れた浩平の声だった。

その迫力に一瞬呆気にとられていたオレンジ短髪男が、睨みつけるような目をして、浩平に殴りかかった。

そこからは、まるで空手の『型』の模範演技を見ているようだった。

流れるような動きで相手の拳や蹴りを払い、無駄なく突きを決める。

空手の有段者である浩平の優位は、最初から圧倒的だった。

慌てて金髪ピアスが加勢に入ったが、力の差は変わらない。

浩平の突きがオレンジ短髪の顔面に入り、蹴りがオレンジ短髪の腹部に決まり、オレンジ短髪の鼻から赤い血が滴った。

敵はもうそれで戦う気力をすっかり削がれたみたいで、オレンジ

短髪が怯えた表情で踵を返して、扉に向かって駆け出すと、金髪ピ
アスも慌てて後を追いかけた。

「逃がすか！」

「————こ、浩平！」

男達の後を追おうとした浩平が、私の声に動きを止める。

そのまま、男達を扉の向こうに見送って、浩平は私に駆け寄った。

14、たどりつく場所

おおさわ きりと

大沢桐人の知人の不良に、逆恨みで絡まれて。

一緒にいた千佳ちゃんが体を張って逃がしてくれたのに、再び屋上で追い詰められて。

もうだめだと諦めた時、その人は私の呼ぶ声に奇跡のように現れて、掬いあげてくれた――。

振り返って、心配そうに私を見る瞳に、そういえば、今までも何度もこうして見つめられ、庇われてきたと思い知らされる。

「大丈夫か？ 怪我はないか？」

「……こ、浩平、浩平……」

「もう大丈夫だから、な？」

頭の中は霞がかかったようで、『浩平』以外の単語が出てこない。浩平が助けに来てくれた。

あんな形でその想いをはねつけてしまった私なのに。

滲んだ景色の中で、ずいぶん懐かしく思える浩平の姿は全然現実味を帯びない。

両手で浩平の腕にそつと触れた。

黒いジャケットの生地をグッと掴んで抱き寄せる。

そのまま私は彼の肩に、自分の額を凭せかけた。

浩平の体がビクリと強ばるのを感じた。

だけど、さっき気づいたばかりの胸に溢れる想い以外のことは、

もはや何も考えられない。

だから、その言葉は驚くほどすんなり唇からこぼれ落ちた。

「……浩平…好き。ずっと好きだったのに……」

「え…?」

「……ごめんね」

「————何が、ごめん?」

嗚咽が漏れる私の目じりを、浩平の指がそつと撫でた。

「……分からなくて…ずっと…自分の気持ち…」

「…早希……」

その時、控えめな声で「橘くん…」と誰かが呼んだ。

屋上の出入り口に、神崎さんが立っていた。

顔をハンカチで押さえた千佳ちゃんを気遣うように、その肩に手を沿わして。

二人の視線を感じて、慌てて浩平から離れようとしたが、いつの間にか背中に回された浩平の手がそれを許さない。

これじゃ、まるで私が抱きしめられているように見えるだろう。

「こ、浩平!?!」

浩平は神崎さんと付き合ってるんじゃないの?

学校で見かけた二人の雰囲気は親密なものだったと思う。

だったら、このシチュエーションじゃ誤解されてしまうよ？

頭が働かず、思わず気持ちを打ち明けてしまったことを激しく後悔する。

浩平を困らせるのは本意ではない。

あたふたする私に、不思議なことに神崎さんは小さな笑みを浮かべた。

「この子…大丈夫だと思うけど、顔を殴られたみたいで…痣になるかもしれない。病院に行った方が良くかも」

「ああ」

「川瀬先輩、大丈夫で良かった。さっきの不良たちが慌てて出ていくのを見て、心配になって来てみたの。この子から川瀬先輩のこと、聞いた橘くん、鬼気迫る様子だったから」

「…うん」

「そっか。橘くん…うまくいったんだ。…良かったね、長年の想いが実って…」

神崎さんの言葉の意味が、よく分からない。

じっと見ていると、神崎さんが寂しそうに笑って、それから私を見た。

「あの…誤解しないで下さいね、最初から私と橘くんはただの友達で…橘くんが断らないのを良いことに、今日も私が無理を言っただけなんです。…でも、私も、これでふっきれると思うから…私、この女の子を病院に連れて行ってきます。駅の反対側の総合病院が休日診療もやっていたと思うし…」

「ううん！ 私が千佳ちゃんを病院に連れて行く。千佳ちゃん、私を庇って殴られたんだから」

浩平の腕を振り切って、私はずっと俯いている千佳ちゃんに駆け寄ろうとした。

「いや。僕が病院に連れて行く」

その声に、ハッと顔を上げた千佳ちゃんが開け放たれた扉を振り返る。

息を切らせた大沢桐人が立っていた。

大沢桐人は私を見ると、ホッとしたような表情を見せた。

「良かった、無事で」

メールを見て、私を捜してくれていたのだ。

大沢桐人は金髪ピアス男やオレンジ短髪男が言っていたような薄情な人でも卑怯者でもなかった。

私の隣に浩平が寄り添った。

ただその事に力を得て、私は大沢桐人に大丈夫と頷く。

千佳ちゃんが視線を逸らせて、項垂れた。

頬を押さえていたハンカチに添えられていた手が力を失い、その頬が露わになった。

痛々しいその様子に、皆、思わず息を飲んだが、視線を落とした千佳ちゃんは気がつかないようだった。

「…桐ちゃん、ごめんね。お節介な事して、早希さん、危ない目に

遭わせちゃって…」

「千佳……」

大沢桐人は唇を引き結び、千佳ちゃんに近寄った。

千佳ちゃんの左の頬骨辺りが腫れ上がり、赤く染まって痣になっていた。

きっと数日後には青あざになるのだろう。

大沢桐人は自分自身が怪我をしたかのように、顔をしかめ、千佳ちゃんの頬に手を伸ばした。

高ぶる気持ちを落ち着けるように、無理矢理呼吸を整えるように、しばらく黙って千佳ちゃんの痣にそっと触れた。剣呑な低い声で尋ねる。

「……この痣…、奴らにやられたのか？」

「一人はやっつけたんだよ。ホントウソみたいに、背負い投げがきれいに決まって！ 桐ちゃんにも見せたかったよお！……だけど、ごめんね。相手は3人いて…早希さん、守りきれなかった…」

千佳ちゃんは申し訳なさそうに、首を竦めた。

大沢桐人は軽く目を見張り、左右に首を振る。

それから、「謝るのは僕の方だ」と小さな声で呟いた。

「そうか。…見たかったな、その場面。ヤツらもびっくりしただろうな……」

「一人目は、投げた瞬間にアスファルトで頭を打って戦闘不能になったから、びっくりする暇もなかったと思うけど」

大沢桐人は驚いたような顔をして、プツと膨れた千佳ちゃんを見つめた後、柔らかに微笑んだ。

ああ、まただ。

彼がこんな無防備な笑顔を見せることは滅多にない。

一度見たのは、千佳ちゃんのお店で千佳ちゃんのテスト勉強を見てあげている時だった。

「…だけど、おまえは女の子なんだから…いくらクラブ活動で柔道やってても、けんかとは違うんだから……」

「え!？ 私が柔道していること、桐ちゃん、知ってるの？ 内緒にしていたのに……」

「おまえがいないときに、マスターが自慢してたよ。中体連の地区大会ではいいセン行ったんだって？ 将来有望だって」

「えー、ただでさえ桐ちゃんには女の子と思ってもらってないんだから、絶対内緒にしてってパパに頼んでいたのに!」

「……おまえの事は…誰よりも女の子だと思っているよ」

何か吹っ切れたような表情をして、大沢桐人は千佳ちゃんを見つめた。

「桐ちゃん、誰よりも女の子って…どういう意味?」

「それは、秘密」

「えっ？　ずるい。なんか余計に気になるよ！」

「……そうだな、千佳が中学校卒業したら、教えてやる」

「そんなあ、まだ2年もあるじゃん」

しっかり者の千佳ちゃんだが、少し拗ねた様子は、中学1年の年相応にかわいらしい。

腫れた頬だけでなく、顔全体が上気しているのは、やはり大沢桐人を意識しているせいだろう。

「……そしたら、千佳はすぐ16才になるし。僕は20才になる」

「当たり前じゃん。桐ちゃんと私は4つ違いなんだから」

「その頃には不自然じゃないってことだよ。僕も腹をくくるから、千佳もそれくらい我慢しろ」

「意味わかんない」と言って俯く千佳ちゃんに優しい目を向けて、ワシワシと髪を撫でていた大沢桐人は、やがてその瞳を私に向けた。

「何か…色々と振り回して…ごめんな？」

「私こそ…ごめん。私、勝手に橘桐人さんを桐人くんに重ね合わせていたの。さっきの絵を見て、やっとそれが間違いだったと気が付いた」

穏やかな眼差しをお互いに交わす。
それ以上言葉を重ねる必要はなかった。

「僕が何も言わなくても、落ち着くべき所に落ち着いたようだね。
：そんな怖い顔で睨まなくても、僕はもう何もしないし、何もさせないよ」

大沢桐人は途中で私から浩平に視線を移すと、クスリと笑った。

「そうか。君は間に合ったんだ――」

それから表情を真顔に改め、目を伏せた。

「もうこんなことがないように、ちゃんと話をつけておく。今までいい加減な事をしてきたツケが、千佳や、早^さ：川瀬さんを傷つけた。自分自身をこんなに悔やんだことはない。すまなかった」

大沢桐人が頭を下げ、千佳ちゃんの背に手を添え促すと、屋上を後にした。

これから病院に付き添うのだろう。

神崎さんが軽く手を振り、その後続いた。

そして、マンションの屋上に私と浩平だけが残された。

15、解き放たれた呪縛

二人きりになったマンションの屋上。

浩平は黙って床に散らばった携帯や財布やポーチやスケッチブックを拾うと、元通りに私のバッグに詰めてくれた。

私は金髪ピアス男に破られてしまった橘桐人のスケッチの断片を拾い集める。

屋上の見渡す限り、小さな欠片も丁寧に拾って、浩平が持つ私の鞆に取りあえず入れたが、きっと何枚かは風に飛ばされてしまっただろう。

一枚一枚に込められた橘桐人の恋人に寄せる想いを思って、たまらなく切なくなる。

取り返しがつかないような喪失感に、また涙が零れた。

「もう気にするなよ。あの日、俺たちが見つけれなければ、そのまま誰にも気づかれず、朽ちていくだけの運命のスケッチだったんだから」

「だけど、私が持ち歩いていなければ……ごめんね」

マンションの屋上の手すりから風下の風景を見下ろす。

葉の落ちたポプラの枝に、スケッチの一片が引っかかっているのが見えた。

じつくりと見下ろしてみると、その高さに足がすくむ。

「どうした？」

「うん。あいつらに捕まる前、ここから飛び降りようかと本気で思

ったの。怖くて躊躇って、出来なかったんだけど……あの時飛び降りていたら、二度とこんなふうには浩平に会えなかったって考えてた……」

突然後ろから伸びてきた腕に引き寄せられた。

いつの間にか私よりずっと太くなった腕が胸の前で交差して、ふんわりと暖かなものに包まれた。

ああ、浩平の香りだ。

懐かしい空気に包まれて、もう安全なんだ、大丈夫な場所に帰ってきたのだと安堵する。

「そんなことになったら……俺……」

ぎゅっと強く抱きしめられた。

頬に感じる浩平の熱い吐息に、私の体温もはね上がる。

浩平の腕にそっと手を添えたら、それは思いがけず、小さく震えていた。

「良かった。……失わなくて」

チラリと浩平も泣いているのではないかと思った。

でも、確認することもせず、私たちはずっとそうやって抱き合っていた。

やがてポツリポツリと、浩平の言葉が落ちてくる。

今まで誰にも話したことはなかったけど、物心ついたときから、大切な物を失う夢をよく見たこと。

大切な物を守るためには強くならなくてはいけないと思い、空手を習い始めたこと。

随分前から、浩平にとって一番譲れないものは「私」だと気づいていたけど、私の気持ちが追いつくまで見守っていくつもりだったこと。

だけど、大沢桐人の出現で焦ってしまったこと。

「夢での出来事があったから…何より早希があいつのことを橘桐人の生まれ変わりみたいにして、惹かれていたことがわかったから…正直、もう俺には望みがないと思ったんだ。早希じゃないなら、誰だって同じだった。神崎と噂になっているのは知ってたけど…もうどうでもいいやって思っていた…」

「…こうへい、ごめんね…」

「今日も神崎に付き合って歩いてたら、早希と女の子が何だか深刻な感じで路地に入るのを見かけたから。…未練がましいなと思うながら、気になって後をつけてしまったんだ。途中で見失って…俺、何やってんだろと思ったけど」

「……」

「やっぱり気になって…そしたら、早希と一緒にいた女の子に出会った」

———千佳ちゃんを見つけて…、だから私の居場所が分かったんだ。

ぼんやり考えながら、背中全体に浩平の温かさを受け止める。

「間に合って良かった。何度も諦めかけたけど、————やっと捕まえた…」

そつと振り向くと、浩平の照れくさそうな笑顔があった。私も嬉しくなる。

私こそ、良かったと言いたい。

浩平を失わなくて。

私にとっても、ずっと心の一番は浩平だったことが、今なら分かる。

でも、あまりに近すぎて、気づこうとしなかった。

居心地の良い関係を変える勇気がなかった。

「そう言えば、あの千佳っていう子、何となく早希に雰囲気似てるな」

「そ…そうかな？」

「うん。何となく天然っぽいところとか、真っ直ぐなところとか、美人って訳じゃないけど何だかホッと癒されるような雰囲気を持っているところとか。…だから、あいつ、早希に拘ったのかもしれないな」

「——美人って訳じゃないけどって言うのが余分だよ！」

私がプイッと拗ねる真似をすると、浩平は「ごめん」とおかしそうに笑った。

「…あいつも、やっと何が一番大切か分かったって感じだったな」

「……それって、千佳ちゃん？」

「たぶんね。きつと些細な事に拘って、ずっと本心から目をそらしてきたんじゃないの？」

確か大沢桐人は『去年の今頃は千佳のヤツ、ランドセル背負っていたんだよ。そんな子供相手に特別な感情を持つなんてあり得ない』と言っていた。

千佳ちゃんとの年齢差を気にしていたのかな。

だけど、彼が千佳ちゃんの前では雰囲気が変わることには、私も気づいた。

トゲトゲしているところがなくて、穏やかで丸い感じ。

そして、千佳ちゃんが大沢桐人を想っていることは鈍い私にもわかること。

じゃあ、二人は相思相愛ってことじゃない？

千佳ちゃんのために、その事実を素直に喜べる自分自身に気づいて嬉しかった。

これもきつと浩平が側にいてくれるから。

「でも、私が千佳ちゃんに似ているなんて思ったこと、なかった」

浩平は腕を緩め、私を解放すると、私の持つスケッチの断片を受け取り、私のバッグに入っていたスケッチブックに挟んだ。

「あいつもこれから苦勞するかもな。惚れた相手が天然だと」

『あいつも』の『も』ってどういうこと？

ひょっとして、浩平も苦勞してるってことを遠回しに言ってる？

じゃあ、私も天然ボケだってこと??

私に向き合った浩平がクスクス笑う。

ここは怒る場面のような気がするんだけど、そんな幸せそうな顔をされたら怒れない。

告白を断ったあの日に、傷ついた浩平の顔を見てから、こんな明るい彼の笑顔は初めて見たかもしれない。

そう思ったら、胸の奥がキュンと痛くなって、また目頭が熱くなった。

「おい、早希！　ここは泣くところじゃないから！　普通照れるか怒るかじゃないの？」

浩平が急に焦った顔をする。

そんなこと言っても、今日はもう涙腺が壊れてしまったかのようだ。

「……もう泣くなよ。酷い顔してるぞ」

「……どうせ元々酷い顔だもん」

酷い顔と言われ、浩平が渡してくれたハンカチで涙を拭う。

「ちょっと貸して」と言われ素直に彼にハンカチを渡した。

目尻に浩平の持つハンカチが触れ、そっと目を閉じる。

次の瞬間、唇に温かく柔らかなものを感じた。

びっくりして後ろに下がろうとしたが、いつの間にか後頭部に浩平の手が回され、それは許されなかった。

———浩平が私にキスをしている。

その事実、頭の中が真っ白になった。

浩平の両腕に包まれ、やがて頭を彼の肩に凭せかけた。

緊張に硬くなっていた身体から、次第に力が抜けていく。

「……早希がどんな顔してても、俺にとっての女の子はずっと早希一人だったよ」

後半だけ聞けば、夢で憧れていたような告白なんだけど。

浩平相手だと100点満点のロマンチックな告白は期待できないかもしれない。

だけど、心は満たされる。

幼い頃からずっと見てきた相手だけに、悪気はないことも、照れ隠しがあることも分かっってしまうから。

むしろ、そうやっていつも彼は、全てをぶつけて、何事にも奥手な私が追い詰められないよう、一つの言葉にも逃げ道を用意してくれるのだ。

大沢桐人が言葉や行動で私を振り回したようではなく。
だから、私は浩平の前ではいつだって自然体で、私らしくいられる。

「じゃあ、これから私が一番傍にいてね」

私の言葉に浩平は幸せそうに「うん」とにっこり笑った。

「俺、空手部は辞めるけど、早希は気にしなくて良いから。あいつらが早希や千佳ちゃんにしたことを思えば、俺はあいつらにしたことを、後悔してない。でも、俺のしたこと、万が一にも他の部員に迷惑がかかるのは不本意だから」

私を家に送り届けた後そう告げたように、浩平は空手部をすっぱり辞めた。

もちろんかなりしぶとく慰留されたが、あの時逃げた高校生らしき連中が報復に、クラブに迷惑になる手段に出るとも限らない。

偶然校内で出会った大沢桐人に、彼らの事を尋ねたことがあった。あの日は、『もうこんなことがないように、ちゃんと話をつけておく』とも言っていたし。

「ああ。まあ、彼らには僕の気持ちは…十分思い知ってもらったからね。もう君たちの前にも二度と現れないと思うよ」

にっこり微笑む彼を見て、何だかゾクツと背中を冷たいものが走ったような気がした。

『十分思い知ってもらった』ってどういう意味だろう。分からないけど聞けない。聞きたくない。

千佳ちゃん…大変だなあって思うけど。

きつと千佳ちゃんは少しも大変なんて思わない。明るい笑顔で、さらりとまっすぐに。

きつと大沢桐人すらも、その軌跡に巻き込んでしまうような気がする。

ただ、大沢桐人が言ったことは本当だった。
それから、再び彼らを見かけることはなかった――。

そのまま穏やかな時が流れ、私は3年生に、浩平は2年生に無事進級した。

あの日、想いが通じ合った私と浩平は、所謂「カレ・カノ」の関係になった。

姉^{ともねえ}は私たちが付き合うことになったと聞いて、

「これで早希ちゃんが本当の妹になる可能性がずっと高くなった訳ね。嬉しい。こらっ、愚弟！ 逃げられないようしっかり頑張るのよ！」と言ってバシバシ浩平の背中を叩いた。

杏子も、

「まあ、こうなるだろうとは思っていたわよ。端から見ればそうとしか考えられないのに、当人同士が話をややこしくして……一時はどうなることかと思ったけど」と……一応喜んでくれた。

杏子の反応は、どうやら私や浩平の友人達とも共通するもので、ずっと以前から仲間内では公認状態だったらしい。私と浩平、当人たちだけが知らなかっただけで。

浩平とはただの幼なじみだった頃とは違って、出かける時は自然に手を繋いだり、甘め50%（辛めも50%）の言葉を遣り取りしたり、……そして時々キスをするようになった。

お互いの家を行き来したり、一緒に登下校したりは以前から変わ

らない。

お互いにとって一番近い場所にいるというスタンスも変わらない。
親友のようで。

姉弟のようで。

そしてその上に恋人という関係——。

浩平は決して私の許容量を超えることを要求したり、急かしたり、無理強いしない。

ただ、「いつも一番近くにしよう。一緒に少しずつ前に進んでいこう」と言ってくれる。

ありのままの私を肯定してくれて。

そして、時々さりげなく背中を押してくれる。

だから、私は一人の時より、ずっと安心して、自由になれる。

マンションの屋上で浩平に助けてもらった後、不思議と橘桐人の夢を見ることはなかった。

橘桐人のスケッチブックはかなりのページが破かれていた。

屋上で拾った断片を、裏からセロテープを使って補修したが、多くの部分が風に飛ばされたのか失われていて、もはや完全に修復は不可能だった。

橘桐人が残した『琴音、おまえを諦めない——』の文字も、眩しそうな笑みを浮かべ宙に手を差し伸べる琴音のスケッチも見当たらなかった。

あの日、浩平の家の蔵の中で、そのスケッチブックを見つけてから長い間、それが傍にないと橘桐人の夢を見た。

——俺はおまえを探し続ける。

俺は、おまえをあきらめないから

闇の中。橘桐人の囁きに心が捕らわれると、切なくて苦しくて眠れなくなった。

スケッチブックがなくても夢を見なくなったことは、不思議だったが、一層心を軽くした。

橘桐人の言葉の代わりに、浩平の温かな冗談や直向きな言葉が私の心を埋めていく。

浩平の存在が橘桐人の呪縛から私を解き放ってくれる。

そのことが、浩平をもっと好きになっても良いんだと、大丈夫なんだと肯定されているようで。

何だかとても嬉しかった。

16、一番大切なこと（完結）

6月。

大沢桐人が描いた私の絵は『雪精』という題で、県の絵画コンクールで入賞を果たした。

銀に霞む背景。

滲む町の景色。

複雑な色彩の鈍色の空から舞い落ちる雪。

それを宙に手を差し伸べて受け止める少女――。

「橘桐人の絵と…少女の容姿も手を差し伸べる構図も…ちよつと似ているけど……」

入選作品が展示されている市民ホールの一角で、私と並んで大沢桐人の絵を見つめながら、浩平は少し首を傾げた。

「だけど、全然違う。全く別の絵だ」

「うん。私もこの絵を見て、はつきり、大沢くんは橘桐人と別人だと…生まれ変わりなんかあり得ないって分かったの」

その言い方が悪くて、千佳ちゃんの誤解を招き、危ない目に遭うことになったのだったと思い返していると、当の本人の聞き慣れた声が出た。

「早希さん！」

後ろからムギユウと抱きつかれる。

「おい、千佳。また子供っぽいことして。川瀬がびっくりしてるじゃん」

呆れたような声が重なる。千佳ちゃんと大沢桐人だった。

大沢桐人は私と浩平が恋人同士になった日から、私のことを『早希』ではなく『川瀬』と呼ぶようになった。

千佳ちゃんは、高校生に殴られた直後、顔が腫れ上がって、学校も数日休まなければならなかった。

大沢桐人は事件後、出来る限り千佳ちゃんに付き添っていたようだ。

その後もしばらく頬に痣が残っていたが、今はすっかりその傷も癒えている。

怪我が治ってから、気持ちの上で吹っ切れたのか、二人が一緒にいる光景をよく見かけた。

今では、あの日浩平が言ってたように、やはり大沢桐人の一番は千佳ちゃんのだと納得する。

「…ねえ、早希さん。橘桐人って？ あの日、屋上でもその名前が出たよね？」

さっきの浩平との会話が聞こえてしまったのだろう。

「以前私が持っていた『桐人』って名前が書いてあったスケッチブックの持ち主」

「じゃあ、あのスケッチブックは桐ちゃんのじゃなかったの？ でも、あのスケッチブックには早希さんのスケッチが一杯で。だから、私はてっきり……」

「あれは、私じゃない。私が生まれるずっと昔に描かれたスケッチ

なの。大沢くんって、橘桐人さんとすごく共通点があって…だから、私、ひよっとしたら大沢くんって彼の生まれ変わりかも…なんて思いついていたくらいで。でも、絵を見たら全然違う人なんだと分かった…だからあの日『これは…桐人さんの絵じゃない』なんて言ってしまったの。もちろん『橘桐人さんの絵』っていう意味で」

「…早希さん、ごめんね。私、早合点しちゃって、あんなことになつて」

「こちらこそ、言葉足らずで心配かけて…ごめんね」

「ううん。私が悪かったの。だから…」

「ストップ。…このまま続けていたら、永久に謝罪の応酬になるんじゃないの?」

見かねた大沢桐人が私と千佳ちゃんの会話に割り込んでくる。

いつもあの日の出来事の話になると、千佳ちゃんと「ごめんね」の応酬になってしまふんだ。

千佳ちゃんは怯まず私を守ろうとして、怪我までしてしまったんだもん。

浩平は私が千佳ちゃんに似てるって言うけど、きっと私にはそんな勇氣はない。

だけど、千佳ちゃんは勘違いで私を連れ出したことで危ない目に遭わせたと、ずっと自分を責めている。

気持ちはお互いに通じ合っているんだけど……。

私たちは目を合わせると、クスリと笑って肩をすくめた。

空手部を辞めた浩平と一緒に、今でも時々千佳ちゃんの店に行く。

相変わらず千佳ちゃんは姉のように、私を慕ってくれている。

専攻が違う大沢桐人とは、千佳ちゃんの店で時々見かけ、会話を交わすが、以前のように掻き回されることもなく、穏やかな友人関係となっている。

私は笑顔で彼に「入賞おめでとう」と挨拶し、再び千佳ちゃんに微笑みかけた。

「ふうん。大沢の目から見たら、早希ってこんな風に映るんだ」

浩平がじっと絵を見て、一人ごちる。

「まあね。初めて見かけたときに校門のスロープでこんな風なポーズで雪の一片を受け止めていて、空を見上げる瞳がとても印象的だった。堕天使が故郷の天空を見つめるような…。だから絵にするときは、できるだけ命や熱を取り去って、幻想的な感じに仕上げたかったんだ」

「そうか。橘桐人は画家で、将来を期待された人物だったんだけど、君の絵からは彼の絵に負けず劣らずの個性の煌めきを感じるよ。モデルのポーズが多少似ていても、質的に全然違う物だ。橘桐人はむしろモデルの命や熱を、キャンパス一杯に表現したかったんだと思う」

「…僕も、橘桐人の絵を見てみたいな。あのスケッチブックにもとても興味を引かれたよ。川瀬がなかなか見せてくれなかったけどね」

「当時の入賞作品は静物画が多くて、探したけど人物画は見つからなかった。だけど、早希そっくりなモデルの絵はどこかで見たのか印象に残っている。スケッチブックにあった手を差し伸べる少女の

絵は油彩でも描かれているはずなんだ。題名は『春』……」

『春』———。

ドキッとした。

私にも記憶があるのだ。あの琴音さんのスケッチの完成品の。色彩を伴った油彩のイーゼル。

その背景は雪の降る街の光景などではなく……。

「光に霞む一面の桜を背景に、一片の花びらを受け止める少女の絵なんだ———」

大沢桐人と千佳ちゃんに別れを告げ、自宅に帰る途中。

私の頭の中は色々な事が駆けめぐり、浩平が訝しげな目を向けていることは感じていたが、何も言葉に出来なかった。

橘桐人の人物画は見つからなかったと言っていたのに、何故浩平に私と同じ『春』の記憶があるのか。

スケッチブックの下絵だけでは、一面の桜の背景や、琴音が受け止めていたのが花びらだったことなんか分からないはずだ。

そう言えば、宗師が言っていた橘桐人の性格は『絵を描く以外全く不器用な人だったけど、優しくて誠実な人』だった。

人見知りが激しく、なかなかうち解けないという琴音さんが、時間を重ねるうちに心を開き、惹かれるようになったのだと言っていた。

そういう人柄は大沢桐人とは全然一致しない。

むしろ一致する人物は私のすぐ傍にいる。

その人物が非凡な才能を見せているのはピアノだけど、その気になれば器用にこなす彼のことだから、出会ったのが『絵画』であつたなら、やはり人並み以上にこなしてしまうに違いない。

もしも、彼が橘桐人の生まれ変わりだとしたら、橘桐人の夢を見なくなった理由も分かる。

『……………俺はおまえを探し続ける。

俺は、おまえをあきらめないから……………。』

橘桐人は夢の中でそう言った。

彼は生まれ変わって、私を見つけた。

そして私と想いが通じ合ったのだとしたら……。

「ちょっと寄っていいこう？」

浩平の声に思考は中断した。

顔を上げると、浩平が家の近所にある児童公園を指差していた。

浩平に告白されて、一度はその想いに答えられないと返事をしたあの公園だ。

同じベンチに腰をかけて、私が隣に座っても、浩平は何も言わず、しばらく誰もいない砂場をじっと見つめていた。

初夏となり、だいぶ日も長くなってきたが、辺りは薄暗くなつていて、もう夕飯時なのか、公園には私たちしかいなかった。

「何だか…答えの見つからない事をグルグル考えているようだけど……」

やがて、浩平は優しく微笑んで私に視線を向ける。
私の心中などお見通しの顔をして。

「もう、いいんじゃないの？ 誰が誰の生まれ変わりだとか」

そう言って浩平は私の頬に片手を添わせた。

「そんな難しい顔するなよ」

「…え？」

「俺にとってはそんな過去の話はどうでもいい。今、早希が俺の隣にいてくれることが、これからも傍にいてくれるってことが、大事なんだ。……笑顔でいてくれないと、俺、すごい不安になる」

ふと浩平の顔が近づくと、私の唇にそっと熱を落とした。

私にとっても同じ。

今、浩平が私の隣にいてくれることが、これからも傍にいてくれるって事が大事。

この温もりを二度と失わないことが大事。

そう考えると、グルグル思っていたことも、すぐく些細で、どうでも良いことに思えてくる。

この手を二度と離さない。

その事さえ間違わなければ――――。

「うん」

笑顔で浩平に答えると、私はそっとその肩に額を凭せかけた。

もう橘桐人と琴音さんのことは忘れてしまおう、それが一番良いのだ。

浩平が反対の手で、私の髪を柔らかに撫でるのを心地よく思いながら、私はずっと心が捕らわれていたものを封印する決心をした。

しかし、6年後。

私と浩平は心ならずも、橘桐人の描いた『春』の実物を手に入れることになる。

橘桐人と親交が深かった宗師さんが実は『春』を所有していて、ある出来事を切っ掛けに、私たちに譲って下さる事になるのだ。

なかなか橘桐人と琴音さんとの絆を断ち切れない事を実感することになるのだけど、それはまだずっと先のお話———。

（ 完 ）

16、一番大切なこと（完結）（後書き）

最後まで読んで下さいまして、ありがとうございました！

『夢のつづき』はこれにて完結です。思った以上にたくさんの方に読んでいただけて、ホント嬉しかったです。

次回、短編『月の記憶』を投稿します。

その後、3月1日（予定）より、新連載『君が呼ぶ風』を始めますので、良かったら、またお付き合いくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8651q/>

夢のつづき

2011年3月3日22時08分発行